富士宮市文化財調査報告書　第12集

小松原A遺跡

県道富士宮芝川線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書　第12集

小松原A遺跡

県道富士宮芝川線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は富士山より南西、および西方にかけて緩やかな裾野の傾斜地にひろがる地であり、恵まれた気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれて、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財につきましては文化財保護法に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めておりますが、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからざる影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっており、開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施して、記録保存の措置をとっております。

このたびの県道富士宮芝川線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、静岡県富士土木事務所の埋蔵文化財に対する積極的な深いご理解とご協力によって、昭和62年9月より約3ケ月にわたり発掘調査を遂行したものであります。そして、その成果は別記に報告のとおり、単に富士宮の歴史を探る手掛かりだけでなく、広く周辺地域の原始、古代史解明への貴重な幾多の新資料を提供してくれました。

人類文明の曙についての経過は今だ定かではありません。この問題を解明するには発掘調査という地味な成果を除々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として大切に生かされて行くべきであろうことに大きな意義を持たなければならないと思います。

ここに富士宮市文化財調査報告書第12集、小松原A遺跡を刊行して、多くの方々のご批判とご指導を承るとともに、最後になりましたが、本書の刊行にあたり、埋蔵文化財の意義を深く理解されて、格段のご配意を賜わりました静岡県富士土木事務所の関係各位、また調査の完遂にご指導いただきました静岡県教育委員会、および地元関係者の皆様のご尽力に対しまして深い感謝の意を表します。

平成元年3月

富士宮市教育長　田口　哲

例　　言

1．本書は静岡県富士宮市沼久保字小松原884-1番地外に所在する『小松原（こまつばら）A遺跡』の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は県道富士宮芝川線道路改良に伴うもので、静岡県富士土木事務所からの委託を富士宮市が受託して、富士宮市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査は昭和62年9月10日より同年11月30日まで実施されて、以後、昭和63年度に整理、報告書刊行作業が継続されて、平成元年3月15日に本書を刊行して本事業を完了した。

4．発掘調査の担当は富士宮市教育委員会主査馬飼野行雄、同渡井一信があたり、同嘱託山上英誉が補佐した。

5．発掘調査の資料整理は馬飼野が主体として行い、渡井、山上、同臨事芦川美智子、川合美枝子、渡井啓子、佐野知穂の協力を得た。とくに土器拓影、石器実測は芦川によるところが大きく、写真撮影は全て馬飼野があたった。

6．本書の執筆、編集は全て馬飼野があたった。

7．地形図、実測図に記す高度は全て海抜高度をもって示している。

8．第1図に用いた地形図は昭和45年2月、建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。

9．土器拓影図は縮尺2分の1として、石器は3分の2～2分の1とそれぞれ図中に縮尺を示している。

10．土器観察表に記す胎土の略語は以下のとおりである。

粗…粗粒　細…細粒　多…多量　少…少量　微…微量　長…長石　英…石英　雲…黒雲母　金雲…金雲母　繊…繊維　砂…角閃石・輝石・橄欖石等を混えるもの

11．土器観察表に記す色調は破片面積のもっともひろい範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖、農林省農林水産技術会議事務局監修で補って判断している。

12．印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。

13．発掘調査に関する全ての資料は富士宮市教育委員会で保管している。

目　　次

1．遺跡の位置と環境……1
　a．遺跡の位置と自然環境……1
　b．富士宮の縄文時代早期主要遺跡について……2
2．遺跡の占有と土層……6
3．発掘調査の経緯と経過……8
　a．発掘調査の経緯……8
　b．発掘調査の経過……9
4．発見された土器と石器……10
　a．土器と石器の出土状況……10
　b．土器の内容……10
　c．石器の内容……14
5．発掘調査の総括－岳南地域の縄文時代早期前半の様相を予想して－……16

図　版　目　次

図－1　遺跡位置図（2万分の1）
図－2　羽鮒丘陵と周辺の縄文早期遺跡分布図
図－3　周辺地形図
図－4　発掘調査区域図
図－5　土器出土状況図
図－6　土器種別出土状況図
図－7　土器拓影図－1
図－8　土器拓影図－2
図－9　土器拓影図－3
図－10　土器拓影図－4
図－11　土器拓影図－5
図－12　石器実測図
図－13　岳南地域の縄文時代早期前半の様相展開図
資　料　富士宮の縄文時代早期主要遺跡について
　　（沼久保、坂上遺跡より転載）

図版－1　調査概要
図版－2　出土土器（1）
図版－3　出土土器（2）
図版－4　出土土器（3）
図版－5　出土石器

1．遺跡の位置と環境

a．遺跡の位置と自然環境

小松原A遺跡は静岡県富士宮市沼久保字小松原884-1番地外10筆に所在する（図－1）。市街地より県道富士宮芝川線を4.5Km程南西進した、JR身延線沼久保駅の右手高台の巾広い舌状の台地で、市街化調整区域内にあって、茶畑のなかに農家が点在する静かなたたずまいを見せている。

この台地はおおきくは羽鮒丘陵に含まれ、市の南西域を白尾、明星丘陵に接続して、富士宮市史上巻（塩川隆司　1971）で紹介すれば、以下のとおりである。

『芝川と潤井川及び富士川に狭まれて南北に連なる丘陵は、羽鮒丘陵といわれている。狩宿、上条、下条を通って南にのびる丘陵は田尻で一度狭くはなるが、再び幅が広くなり富士川で終っている。両端は芝川と安居山、沼久保の谷に狭まれ広いところでは2Kmぐらいあった幅も次第に狭くなっている。

富士川岸でいったん終ったかのように見えるこの丘陵も、地形的、地質的には富士川対岸に連続している。ここはかつては連続していたのだが、富士川の浸食により切断されたものである。

羽鮒丘陵は、富士宮市と芝川町との境界にあたり、境界線を境にして芝川町側は緩傾斜であるが、富士宮市側は急傾斜（断層崖）となっているので人々の交流の障害となっていた。

最高海抜は青木西方で326mあり、ここから富士宮市側は約30°、芝川町側は約10°の傾斜で徐々に下っている。

この丘陵の南部は、洪積前期の岩渕火山群噴出物で北部にいくにしたがい基盤は別所礫層となり、その上に古富士集塊質泥流がのったもので、古富士集塊質泥流の噴出後、断層運動が起り安居山断層が羽鮒丘陵東縁を切断し、約250mの断層崖を形成し安居山谷をさらに深いものとした。

その後の新富士噴出物の溶岩流は、断層崖でくいとめられたため大中里踏切付近では万野風穴などで見られる溶岩が崖にのりあげている。また大部分の溶岩流は別所を通り安居山谷、さらには沼久保まで続いている。

白尾山（238m）、明星山（225m）を主とした白尾、明星丘陵は潤井川と富士川との間を北西から東南に小高く連なっている。この間、安居山、沼久保、星山、貫戸の4つの谷が富士川側から入りくんでいる。

白尾山を始め大部分は、羽鮒丘陵と同じ古富士集塊質泥流で形成されている。いっぽう明星山は、羽鮒丘陵南部と同じように岩渕火山の噴出物が富士川を渡り堆積したものである。

明星山の岩渕火山噴出物の下層には凝灰岩の層があり、昔、海であったことが考えられる。この地域の中の明星山北西部や星山谷の東側、および富士川沿いには別所礫層の露頭があるが、

別所礫層と岩渕火山の噴出物との関係は不整合である。点々と存在する別所礫層から考えると、古富士集塊質泥流の基盤は別所礫層であったらしい。

前記の４つの谷のうち、安居山谷だけに新期富士溶岩流が流れこみ、沼久保谷、星山谷、貫戸谷に見受けられないのは、溶岩流噴出前に丘陵の北側に大宮断層ができたので、断層崖でくいとめられ、これを乗りこえることができなかったためであろう。

芝川や富士川岸には、富士溶岩流の流出前の洪積期段丘やこの時代より新しい沖積期段丘がはっきり区別される。

星山谷と貫戸谷には３段の段丘が発達している。これらの段丘は芝川駅付近に発達する洪積期段丘に対比されている。』

この自然環境が絶好の生活条件を生み出したことは遺跡分布で容易に知れ（図－２）、 とくに羽鮒丘陵から明星丘陵にかけて、それぞれ芝川、富士川、潤井川をのぞむ河岸段丘に芝川町小塚A遺跡、富士川町上野遺跡、本遺跡と沼久保谷を対峙して沼久保坂上遺跡など、また、丘陵内部に黒田向林遺跡、星山谷周辺に月の輪遺跡群、奥山地遺跡と地域を代表する縄文時代早期遺跡が鎖状となって位置して、それは富士山麓域へも波及して上石敷遺跡、代官屋敷遺跡、若宮遺跡などと続き、しかも、これらの標高が120m前後をたどっていくことが指摘がされる。

ｂ．富士宮の縄文時代早期主要遺跡について

富士宮の縄文時代早期の遺跡については富士宮市文化財調査報告書第７集　沼久保坂上遺跡（伊藤昌光　1985）で詳細な紹介がされている。それによれば以下のとおりで、その後の調査、沼久保坂上遺跡、黒田向林遺跡を付記しておく。

なお、文中の挿図番号は上記報告書中のもので、巻末に図版を掲載してある。

『富士宮市内には、現在縄文時代早期の遺跡が19ケ所確認されている。そのうち発掘調査がおこなわれた遺跡および出土資料の確認ができたのは次のとおりである。

若宮遺跡

若宮遺跡は富士宮市小泉字古宮2343－23番地他に所在する。西富士道路（富士宮地区）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昭和54年～昭和57年にかけて発掘調査が実施された。

その結果、表裏縄文土器、縄文土器、撚糸文土器、押型文土器等の早期前半の土器群と、それに伴う石鏃、石皿、磨石等の石器が多数出土した。また竪穴住居跡28基、炉穴跡60基、集石土坑跡13基、集石跡５基、土坑跡12基の遺構が検出された。

代官屋敷遺跡

代官屋敷遺跡は富士宮市小泉字代官屋敷2244－２番地他に所在する。西富士道路建設工事に伴う発掘調査として、昭和53年～昭和56年にかけて若宮遺跡と並行して発掘調査が実施された。

その結果、撚糸文土器、押型文土器（楕円のみ）、沈線文土器、条痕文土器が出土し、遺構は集石跡５基が検出された。

上石敷遺跡

上石敷遺跡は富士宮市小泉字石敷737－1番地他に所在する。昭和56年～昭和57年にかけて発掘調査が実施された。

その結果、撚糸文土器、条痕文土器が出土した。

滝戸遺跡

滝戸遺跡は富士宮市黒田658番地に所在する。市立第三中学校校舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昭和51年～昭和54年にかけて3回の発掘調査が実施された。

その第Ⅱ次調査（昭和52年）の際、撚糸文土器尖底部1点と無文土器が出土した。遺構は無文土器が伴う配石が指摘されている。

月の輪平遺跡、南部谷戸遺跡

月の輪平遺跡は富士宮市星山字月の輪1020－2番地他、南部谷戸遺跡は同黒田360番地他に所在する。星山放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昭和45年～昭和47年にかけて実施された。さらに月の輪平遺跡は砂利採取工事に伴い昭和56年発掘調査が行なわれた。

その結果、古墳時代初頭の遺物に混在するかたちで、撚糸文土器、楕円押型文土器、絡条体圧痕文土器、条痕文土器等の縄文時代早期の遺物が検出された。

月の輪上遺跡

月の輪上遺跡は富士宮市星山字月の輪995－1番地他に所在する。昭和55年月の輪上遺跡緊急調査事業として発掘調査が実施され、弥生時代終末の集落跡が検出された。

縄文時代早期遺物は発掘調査地点の南約200 m付近で、野村昭光氏により表面採集されている。現況は畑地で、耕作により表面に露出したものである。

第20図1～19（図版第23）は月の輪上遺跡より表面採集されたものである。

1～9は押型文土器である。1は原体1周に山形文1単位を印刻し横位回転した山形押型文が施文されている。山形文は山形頂部がとぎれ、幅が狭い。2は原体を横位回転して幅の広い山形文が施文される。3は2種類の格子目押型文が組み合せて施文される。1は胎土に砂粒が多量に含有され、色調はにぶい褐色を呈する。2・3は胎土に多量に長石粒・石英粒を含有し、色調はにぶい褐色を呈する。

4～9は楕円押型文が施文される。4は原体を横位に回転して横位の細かな楕円押型文が施文される。胎土には多量の金雲母と長石粒・石英粒が含有され、色調は褐色を呈する。5は波状口縁を呈する。斜めの楕円押型文が施文される。原体の回転方向は縦位かと思われる。5・6は胎土に砂粒が多量に含有され、色調はにぶい褐色を呈する。7・9は胎土に繊維が含有される。8は石英粒・長石粒・金雲母が含有される。

10～15は太い沈線文または凹線文が施文される。10・11は波状口縁で、10は屈曲する段が見られる。12～15は同部破片で段が見られる。12・13・15は内面に条痕文が見られる。胎土には繊維が含有され、色調はにぶい褐色を呈する。野島式土器の範疇に入るものと思われる。

16・17は内外面に明瞭な貝殻条痕文の施文されるもので、16は口唇部に丸い棒の側面を押圧した連続文が見られる。胎土には繊維が含有され、色調はにぶい褐色を呈する。

18は太い沈線文の曲線と連続刺突文の見られるもので、胎土に大粒の小石と繊維を含有する。

19は節の不明瞭な太い縄文が施文される。胎土に繊維を含有し、色調はにぶい褐色を呈する。

奥山地遺跡

奥山地遺跡は富士宮市黒田1043番地他に所在する。月の輪上遺跡の東約300mに位置し、明星丘陵北側緩斜面に立地する。

昭和46年桜木の植樹が行なわれ、その際多量の土器が出土し、野村昭光氏他により採集された。それは小野真一氏により報告されている。

第21図1～第22図38（図版第24～26）は奥山地遺跡より出土したものである。

1～9は押型文土器である。1～3は山形押型文が施文される。1は棒軸1周に2単位の山形文を印刻した原体を横位に回転した山形押型文が施文される。原体端は直角に切断される。原体径10mm。2は1に類似した原体を縦位に回転した山形押型文が施文される。3は原体を縦位および斜位に回転施文している。1～3は胎土に多量の長石・石英等の小礫と、少量の繊維を含有し、色調は灰褐色から赤褐色を呈する。

4～9は楕円押型文土器である。4～8は同一個体かと思われる。口縁部は大きく外反し、底部は尖底が推定される。径10～15mm前後の大形楕円文が施文される。原体回転方向は不規則である。器厚10mm。胎土に多量の長石・石英等の砂粒と繊維が含有される。色調はにぶい褐色から暗褐色を呈する。9は器厚20mmと厚く、不明瞭な大形楕円文が施文される。胎土は前者に類似する。

10～21は撚糸文土器である。10～12は同一個体かと思われる。弱く外反し、口唇部は粘土紐を貼付して整形し、丸棒の側面を押圧した連続文が見られる。1段R撚りの撚糸文が口唇部直下に無文部を残して施文される。13は節の細長いLの撚糸文が施文され、口唇部には丸棒側面を斜めに押圧した文様が見られる。

14はRの撚糸文が無文部を残して斜位に施文される。15・16は条間隔の広いRの撚糸文が施文される。17は太いRの撚糸文と、細いLの撚糸文が施文される。

10～17は胎土に長石・石英等の小礫と繊維を含有し、色調はにぶい褐色から暗褐色を呈する。

18～21は交差する網目状の撚糸文の施文されるものである。18は外反する口縁部破片で、棒軸に0段ℓ撚りの紐を網目状に捲いた原体を回転して施文したものか、斜の一方向に捲いた原体を方向を変えて施文したものか判別できない。器厚10mm。21は18の同一個体かと思われる。器厚18mm。胎土に長石・石英の小礫と繊維を含有し、色調は明褐色を呈する。

19・20は同一個体かと思われる。18に同様の撚糸文が施文される。胎土は長石・石英等の小礫と繊維・金雲母が含有され、色調は褐色を呈する。

22は条間および節の間隔が広い縄文が施文される。縄を回転せず押圧したのかもしれない。

器厚５～７㎜。胎土に多量の金雲母を含有し、色調は褐色を呈する。

23～25は貝殻腹縁文の施文されるもので、23・24は沈線が伴う。胎土には微細な長石粒・石英粒・金雲母等が含有され、色調は褐色を呈する。

26は段を有する破片で、段上部に縦位の隆起線文が施文される。内面は横位の条痕文により器面調整される。胎土には小礫と繊維が含有され、色調は褐色を呈する。

27は粘土を横位に貼付し、その上に縦位の沈線文が施文される。胎土には繊維を含有する。28は丸い棒の先端を刺突しながら押し引いた文様が施文される。

29は沈線文が格子目状に施文され、内面には貝殻条痕文が見られる。30は器面の凹凸の激しい口縁部破片で、内面に波状の条痕文が施文される。31・32は外面に条痕文が施文される。33は条痕文と刺突文が見られる。29～33は胎土に石英粒・長石粒と繊維が含有され、色調は褐色から暗褐色を呈する。

34は内湾する口縁部破片で波状口縁となるかもしれない。全面に大きな刺突文と沈線文が施文される。胎土には砂粒と繊維が含有される。

35～37は底部付近の破片である。文様は施文されない。35・36は器厚８～10㎜。37は15～20㎜である。胎土は多量の小礫と繊維を含有し、色調は褐色を呈する。

38は平行沈線文が施文される。胎土に砂粒が多量に含有され、色調は暗褐色を呈する。

箕輪遺跡

箕輪遺跡は富士宮市大岩字箕輪に所在する。西側を箕輪Ａ遺跡、東側を箕輪Ｂ遺跡と呼称している。古くから縄文時代中期～後期の遺跡として知られ、多量の遺物を出土している。第20図20は野村昭光氏により箕輪Ｂ遺跡より表面採集された山形押型文土器である。山形押型文が縦位と横位に施文されるもので、無文部を残しており、いわゆる帯状施文構成をとるものである。器厚７㎜。色調は灰色を呈する。

丸ケ谷戸遺跡

丸ケ谷戸遺跡は富士宮市大岩字丸ケ谷戸に所在する。第20図21は野村昭光氏により表面採集されたもので、２帯の横位の隆帯と、その下に縦位の山形押型文が見られ、押型文が他種文様と伴用されるものである。胎土には砂粒と繊維が多量に含有され、色調は明褐色を呈する。』

沼久保坂上遺跡

沼久保坂上遺跡は富士宮市沼久保字坂ノ上410番地他に所在する。本遺跡と沼久保谷を対峙して約１㎞程した舌状台地を占有して、それは富士川におおきくせり出している。古くより周知されて、昭和44年にはガソリンスタンド建設工事に伴って多量の遺物が出土して、その状況は静岡県文化財保護指導員野村昭光氏より紹介された（野村昭光　1969）。

本格的な発掘調査は昭和59年４月～５月、東京電力株式会社の送電線鉄塔化工事に伴って実施された。その結果、縄文時代早期中葉の大規模な配石遺構が検出されて、列状、環状をなす配石の初源を探る問題提起もされた。調査面積に比べて土器は豊富で沈線文土器、押型文土器、

撚糸文土器が出土して、これらが組み合された一群の土器が成立するであろうことが指摘された。とくに高山寺式土器の波及が一般的事象で、沈線文系土器群を併存する事実をあわせ、縄文早期中葉〜後葉の本地域の遺跡のあり方を予察した。

黒田向林遺跡

黒田向林遺跡は富士宮市黒田字向林1244番地他に所在する。小松原A遺跡や沼久保坂上遺跡が占有する羽鍬丘陵の中央に位置して、昭和60年3月〜4月、不動産会社の宅地造成工事に伴って発掘調査が実施された。この遺跡は昭和60年1月に新発見されたもので、南東面する狭い傾斜地より多量の遺物と小規模ながら3ケ所に集石土坑状の遺構を検出した。

土器は撚糸文、押型文、沈線文、縄文など豊富で、その組み合せは沼久保坂上遺跡での予想を充分に立証するものであった。とくに高山寺式土器の一括資料はその東限にあって伊豆峠遺跡とともに極めて重要で、沈線文系土器群、田戸下、上層との併存、また、撚糸文土器の本地域でのあり方などを示唆してくれた。

近年、このように相次ぐ縄文時代早期遺跡の発掘調査はその具体相を予想するまでにきている。

塩川隆司　1971　「第2節　富士宮市の山と川　（4）羽鍬・白尾・明星丘陵 」『富士宮市史上巻　総説第1章　富士山』富士宮市

伊藤昌光　1985　『沼久保坂上遺跡』　富士宮市教育委員会

野村昭光　1969　「富士宮市大場山出土の縄文土器」『駿豆考古』8

2．遺跡の占有と土層

本遺跡は沼久保谷が富士川に開口する右岸末端の河岸段丘を占有する（図－3）。その富士川側はそれの攻撃面となって、比高70m、斜度60°程の絶壁となり、沼久保谷側は比高30m、斜度40°程と緩くなるもののそれぞれの浸食を受け、舌状となって南西にのび、他とはっきりと区別された地形となっている。

その舌状平担面は標高120mの等高線によって巾100m、長さ200m程で描出され、それにしたがっておよそ25,000㎡の包蔵が推定されている。それから南西に除々に下って標高50mで富士川に没するが、その途中には縄文時代中期の包蔵が推定される小松原B遺跡が占有している。

また、反転した舌状基部は斜度50°で一気に登って標高261mの小峰に達し、北西側、つまり背後に「壁」をひかえた、本地域にしばしばみられる縄文時代早期遺跡の占有構造を示す。なお、北側山腹に湧水をみて、それより小谷が刻まれて沼久保集落に下る。JR身延線沼久保駅はその小谷を埋めたてて築かれている。

詳細すれば舌状平担面も北西側小峰から扇状にひろがる緩い凸凹が観察され、本調査対象地

も南にむかう弱い谷地形と小瘤地の連続となっている。したがって土層堆積も必然的に流動性に富むことが予想されて、ここでは本地域の大略的な土層堆積状況を加味しながら以下に分層しておきたい。

1．表土層

黒色有機質土からなる表土層で、上半部は耕作土となる。イモ穴、茶根が及んで乱れている。下半部には小粒で少量のスコリア粒が点在している。

2．大沢ラピリ層

緻密なスコリア粒が堅固なマサ層をつくる、いわゆる「富士マサ」である。乾燥すると燈色から白っぽく変色する。その堆積時期は約2,700年前の新富士火山爆発によるとされる。

3．黒褐色土層

上層の影響でスコリア粒を若干含み、粘性に欠ける。下半にしたがい粘性を増し、スコリア粒も減る。黒色が強いため「黒ボク」と称されて、混入する千居ラピリ（赤田貫）より、B.P3,500年前後の堆積が考えられている。

4．茶褐色土層

除々に粘性を増して、本地域で縄文時代の鍵層となる「栗色土層」に対応されようが、若干の小砂礫を混入して連続した堆積が認められないため上記を呼称した。栗色土層はB.P6,000年位前の堆積であるらしい。

5．灰黄褐色土層

黄褐色土層の漸移層であるが、上層より混入する小砂礫の度合が増し、黄褐色土層にみられる粘性が感じられない。

6．灰赤褐色土層

やはり下層の赤褐色土層との漸移層であり最深部では第5層とレンズ状に互層をなす。小砂礫の混入が非常に顕著で、しかも大きめとなる。

7．黄褐色土層

粘性をもち、小砂礫の混入もないローム質土で、高所にしたがい黄色を増すのは浸食流出のためで、本層と小砂礫の混入土層が第5層である。一般的には本地域の遺跡確認面最下層にあたる。

8．赤褐色土層

小砂礫の混入度合、ならびに大きさも増すため、土層全体の粒子は粗くなるが、反して粘性は非常に増してくる。通常の赤褐色土層は大粒のスコリアを多量に含有して赤色にちかいが、本遺跡では土色自体が「小豆」色ぽく感ずる。その赤褐色土層は沼津市休場遺跡の最上層に対比されて、洪積世最末期～沖積世初頭（B.P10,000年位前）、旧石器時代包含層とされる。

9．暗褐色土層

第3層と第5層間の漸移層で、調査区東寄りの黄褐色土層の露出が強い部分の上層に残存す

る。

10．黄褐色ブロック混入灰黄褐色土層

調査区中央の北～東側斜面に弧状に露出する巨礫帯よりの２次堆積土である。

以上のように本遺跡の土層堆積状況は小礫が各層に混入して、しかもそれは下層にしたがい大きさを増すというように弱い谷地形を下る雨水にさらされながら順次堆積していった過程がうかがえ、予想以上の土層の流動を考えねばならぬ状況にある。

なお、本来ならば第４層下に黒色土層帯、つまり富士黒土層が堆積し、その堆積時期がB.P10,000～8,000年位前とされるから縄文時代早期の包含層として容易であるが、沼久保坂上遺跡でも確認がなく、黒田向林遺跡で希薄であるから、富士黒土層の分布は富士山麓域に制限されるかも知れない。

３．発掘調査の経緯と経過

a．発掘調査の経緯

本発掘調査の起因となったのは県道富士宮芝川線の道路改良である。その改良計画は年々交通事情の悪化する富士宮、芝川間の混雑緩和と交通環境の保全を確保しようとするもので、とくに沼久保地先は本遺跡が占有する舌状地形をおおきく迂回するこの区間の円滑な交通の確保が急務となり、これを切り通すことで交通環境の保全を図ろうとするものであった。

この改良計画は昭和60年２月、静岡県富士土木事務所より富士宮市教育委員会に提示されて、同年７月８日、富士宮市沼久保字小松原884-１番地他、約2,500㎡の路線予定地内における文化財有無確認についての依頼（富士企第99号）がなされた。

以後、路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされ、富士宮市教育委員会は昭和61年11月17～20日、小松原A遺跡埋蔵文化財確認調査を実施して（１×1 30mの試掘溝を縦断設置）、北側部分およそ800㎡に遺跡の包蔵が確認されることを昭和61年12月３日に回答（富教社第294号の２）した（図－４）。

この結果にもとずき、両者の具体的な取り扱いについての検討を行うなかで、一応、工事着工以前に発掘調査を実施して記録保存する方向で協議が進み、昭和62年５月28日、静岡県富士土木事務所は文化財保護法第57条の３第１項の規定により、埋蔵文化財発掘通知（富土第１号）を文化庁に提出して（62委保記第２－2738号昭和62年９月28日受理）、昭和62年６月19日、静岡県教育委員会より発掘調査の実施を通知（教文第３－84号）された。これを受けて、具体的な準備、検討が行われて、発掘調査は静岡県富士土木事務所からの委託を富士宮市が受け、富士宮市教育委員会が実施することになり、昭和62年８月６日、小松原A遺跡埋蔵文化財に関する協定が交され、以下の発掘調査委託契約がなされた。

・昭和62年度　昭和62年８月６日

1．委託業務の名称　昭和62年度〔第0027号〕（主）富士宮芝川線道路改良（小松原A遺跡）発掘調査委託

2．委託期間　昭和62年8月7日から昭和63年3月20日まで

3．委託金額　金　4,086,000円

4．発掘調査対象地　富士宮市沼久保地内

・昭和63年度　昭和63年5月31日

1．委託業務の名称　昭和63年度〔第0720号〕（主）富士宮芝川線緊急地方道道路改築（B）（小松原A遺跡）発掘調査委託

2．委託期間　昭和63年6月1日から昭和64年3月15日まで

3．委託金額　金　1,146,000円

4．発掘調査対象地　富士宮市沼久保地内

これより富士宮市教育委員会は以下の体制で、昭和62年9月10日より発掘調査を開始して、現地作業を同年11月30日に終了、以後、整理作業にはいった。なお、整理作業は昭和63年度に継続されて、平成元年3月15日、本報告書を刊行した。

調査主体　富士宮市教育委員会　教育長　塩川隆司（～昭和63．2．1）
田口　哲（昭和63．2．2～）

発掘担当者　馬飼野行雄　富士宮市教育委員会社会教育課主査
渡井一信　富士宮市教育委員会社会教育課主査
山上英誉　富士宮市教育委員会嘱託（昭和63年度）

現場作業員　望月秀雄、山上英誉、渡辺進、佐藤嘉吉、吉野忠親、土井満里子
川合美枝子、吉野ふみ子、大平美奈子、中瀬小夜子、服部秋子、佐野幸子
佐野春江、笠井久子、佐野美津子、佐野友子、佐野令子、佐野藤子

整理作業員　芦川美智子、川合美枝子、渡井啓子、佐野知穂

b．発掘調査の経過

発掘調査は先ず、確認調査で石鏃が第4層茶褐色土層、縄文時代早期土器片が第5層灰黄褐色土層より出土したこと、遺跡地名表に縄文時代早期、後期と登録されて、今表面踏査でもそれ以降の遺物が確認されないこと等、以上から発掘調査の迅速、省力化を旨に第1層表土層、第2層大沢ラピリ層の除去を慎重にして重機に頼った。

上層除去後、調査区にN－45°－Eの5mグリッド（方眼）を設定して、それにしたがい発掘調査を進めることとした。その呼称は道路短辺を北西から南東へA・B・C……のアルファベット、長辺を北東から南西へ1・2・3……の数字列とした。したがって、具体的には北西接点をもってA－1グリッド、B－1グリッドと呼称して、調査区にはA～E－1～7のおよそ35グリッドが設定された。そのうちA－1・6・7グリッドは表土下に直接、黄褐色土層下

部から礫層の露出をみて対象外として、調査面積はおよそ800㎡となった。

以後、発掘調査は各グリッド毎、土層の変化に応じて精査を進めて、遺物は平、断面出土地点を記載、さらに土層内の上・中・下部が判断されて取り上げられた。しかし、本調査区が中央を南方を下る弱い谷をもち、南西隅からはそれにむかう新たな凹帯も形成されるなど、地形がうねった状況下にあり、また、両者を分断するように巨礫帯の露出もみて、果して有効であったか不安である。いずれにしても本地域の縄文時代早期遺跡は南方に開折する小谷を占有する傾向にあり、遺物分布に明瞭な効果が得られずにいて、本教育委員会が1982、83年に実施した小泉の代官屋敷遺跡、若宮遺跡で指摘されるようにひろい発掘域のなかでの平面的な分布の把握が有効であるかも知れない。

遺構は土層の変化に応じた面的精査、トレンチによる断面観察によって追求したものの皆無で、D－2～E－2グリッドにまたがって、風倒木痕であろう長径3.5m、短径2.7m、深さ0.7m程の楕円形、椀状の落ち込みが確認されたにすぎなかった。

遺物包含層最下部（黄褐色土層上部～赤褐色土層上部）に達した後、調査区南東隅（仮称Fライン）にトレンチを設定して下層の追求を行ったが、遺構、遺物の確認はなく、現地の発掘調査を終了した。

4．発見された土器と石器

a. 土器と石器の出土状況

調査区のうねりに合わせて、低位に沿った帯状の出土状況がみられる（図－5）。とくに中央の弱い谷地形に顕著で、A～E－3グリッド、E－4グリッドに出土量が目立つ。また、Eラインより南東側に拡大傾向があり、遺跡がそちらに延長する可能性もある(注)。C－7グリッド辺より東面する窪地にこぼれる一群もみるが、破片数の割に個体数はなく、極く限られた時間の分布であろう。

石器はまったく目立たず、これが本遺跡の特色となるか、限られた調査区で判断されないが、黒曜石剥片12点、22.3gの出土は異例で、石器欠乏の事実を裏付けているかも知れない。反面、頁岩剥片は富士川が産地であるから多いが、それによる製品はない。

注．石斧8点中、5点を調査区南東側50m付近で表面採集する。

b. 土器の内容

上記の出土状況をもって縄文土器片335点、遺跡確認調査、および表面採集を合わせて374点が検出された。それは以下に分類される（図－6～11)。－（　）は個数－

第Ⅰ群　縄文が施される土器（81）

A類　表裏両面に施されるもの（28）

1種　表裏両面に施されるもの（10）

2種　上種に酷似した胎土、焼成をもちながら表面に施されるものと脆弱なため表裏片面が剝落したもの（18）

B類　表面から口唇部、口縁部裏面に施されるもの（8）

1種　細かな節、条をもって施されるもの（6）

2種　上種より大まかな節、条をもって施されるもの（2）

C類　表面に施されるもの（42）

1種　一面に施されるもの（24）

2種　帯状的な余白をもって施されるもの（12）

3種　とくに大まかな節・条をもって施されるもの（3）

4種　とくに細かな節・条をもって施されるもの（6）

第Ⅱ群　撚糸文が施される土器（92）

A類　表面と口縁部裏面辺に施されるもの（4）

1種　表面と口縁部裏面辺に施されるもの（2）

2種　上種に類似した施文形態で表面に施されるもの（2）

B類　表面に施されるもの（84）

1種　一面に施されるもの（17）

2種　帯状的な余白をもって施されるもの（64）

3種　断続的に施されるもの（3）

C類　絡条体圧痕が施されるもの（4）

1種　密接した柔軟な圧痕が施されるもの（1）

2種　列点状の圧痕が施されるもの（3）

第Ⅲ群　押型文が施される土器（4）

A類　山形文が施されるもの（4）

1種　縦位に密接して施されるもの（2）

2種　縦位に帯状で施されるもの（2）

第Ⅳ群　条痕文が施される土器（66）

A類　薄手で灰色を帯びるもの（45）

1種　口唇部と口縁下部の突帯に指頭による圧痕が施されるもの（1）

2種　口唇部と口縁下部の突帯にヘラ状工具による刻目が施されるもの（3）

3種　口唇部に指頭による爪形が施されるもの（3）

4種　上種に酷似した胎土・焼成・成形等をもつもの（38）

a　条痕がなでられるもの（20）

b　条痕が顕著にのこるもの（18）

B類　厚手で赤色を帯びるもの（21）

1種　波状口縁の口唇部にヘラ状工具による刻目が施されるもの（8）

2種　上種に酷似した胎土・焼成・成形等をもつもの（13）

第V群　意識的な文様が施されない土器（99）

A類　口唇部に丸棒状工具の側面押圧が連続して施されるもの（28）

1種　口唇部に丸棒状工具の側面押圧が連続して施されるもの（2）

2種　上種に酷似した胎土・焼成・成形等をもつもの（26）

B類　赤〜橙色を帯びるもの（43）

1種　厚手のもの（29）

2種　薄手のもの（14）

C類　乳〜灰色を帯びるもの（28）

1種　厚手のもの（12）

2種　薄手のもの（16）

文様の不明な土器（31）

その他の土器（1）

これらは文様の不明な土器、その他の土器（五領ヶ台I式）を除けば、全て縄文時代早期の所産である。

ここではそれぞれを以下に観察しておきたい。

第I群A類1・2種は器面の表裏に縄文が施される土器で、赤褐色を呈して金雲母を多量に含む特徴をもつが、それ故、胎土が脆弱で剥落が著しい。縄文はLRが全てで、裏面は施文後、なでられて消失する部分もある。本地域では若宮遺跡初段階に出現して、岐阜県椛の湖遺跡（紅村弘　1974）の表裏縄文土器（椛の湖II式）に対比すれば、多縄文系土器群最末期にあたろう。

第I群B類1・2種は表面から口唇部と口縁部裏面に一帯の縄文が巡る土器で、口縁部はおおきく外反して、76・91・158にしたがい、口唇部の施文がはっきりして角頭状を呈する。胴部は若干張った形状がうかがえる。なお、縄文は依然としてLRである。これらは口縁部文様帯を形成する古式な様相から、第I群A類1・2種に併存、もしくは連続する予想が若宮遺跡でされている。

第I群C類1〜4種は表面に縄文が施される土器で、第I群C類1種が一般である。その縄文はさまざまで、大まかな節、条をもつもの（263・表採A・348）にRLが増して、胎土は粗く鈍重となる。口縁部は若干内湾気味に立ち上がって角頭状を呈して、丁寧になでられる。

第I群C類2種もおよそ第I群C類1種と同様の胎土・焼成をもつが、口縁部は弱く外反して、角頭状の口唇部、ならびに裏面は丁寧になでられる。帯状に下る縄文（16・128・8など）はRLが半数を占めるようになり、大まかな節、条も同1種（263・表採Aなど）のRL資料

に類似する。

第Ⅰ群C類3種はとくに大まかな節、条の縄文が施されて、一見、押圧ともとれる。胎土・焼成は粗く鈍重で同1・2種と大過ない。なお、153は口縁部辺で裏面にも縄文が認められる（第Ⅰ群B類に編入可）。

第Ⅰ群C類4種はとくに細かな節、条の縄文が施されるもので、出土区が相反するものの、焼成・色調など第Ⅰ群B類1種にちかい。

以上、第Ⅰ群C類1～4種は大まかな節、条の縄文が施されることが特徴で、これは若宮遺跡で「太い縄文の土器」と俗称されて、口縁部文様帯の継承から初段階に次ぐ位置が確保されている。

第Ⅱ群A類1種は多彩な撚糸文が施される土器群中、唯一の口縁部で角頭状を呈して直立する。撚糸文は表面を縦位に下り、裏面は横位一帯で巡る。非常に太く深く施されるが、第Ⅱ群A類2種（10）から密接せずに帯状的な余白をもつことが知れる。

第Ⅱ群B類1種は表面の全てに撚糸文が施されるが、破片資料の判断は不安でむしろ胎土・色調など第Ⅱ群B類2種にちかい部分が多い。

第Ⅱ群B類2種は縦位に帯状的な余白をもつ土器で、数量も圧倒してかなり意識された一般的施文と理解される。これを詳細すると撚糸文が連続して垂下するのではなく、1～2回転して止切れる断続的な施文で第Ⅱ群B類3種に発展する可能性をもつ。

第Ⅱ群B類3種はおそらく表面を撚糸文が縦～斜位に断絶しながら乱走するもので、黒田向林遺跡では和歌山県高山寺式土器（浦宏　1936）を共伴する。

第Ⅱ群C類1種は密接した柔軟な側面押圧が施される土器で、絡条体圧痕文として異種に扱うべきかも知れない。第Ⅱ群C類2種は83・表28が同一個体で、胎土に繊維を含んできつい尖底から口縁部に直立して口唇部を肥厚外反する。絡条体は列点状に間隔をもち、底部辺では条痕状に引かれる部分もあるが、観察に不安がのこる。

なお、207・335は網目状の撚糸文が浅く施された底部辺の破片である（後に判明）。

第Ⅲ群A類1種は角頭状を呈して直立する口縁部の表面を山形押型文が縦位に密接して施される土器である。繊維を含まず、器厚を薄くもつが器面は粗い。第Ⅲ群A類2種は大ぶりの山形押型文が縦位に帯状で施される土器で、その端部は楔状を呈して胎土には繊維が目立つ。従来、本地域の押型文土器は撚糸文土器に遜色はないはずで、この極端な劣性の事実を今後に注意しておきたい。

第Ⅳ群A類1～4種は繊維を含み条痕調整された薄手の灰色を帯びる土器である。口縁部より3種にされて、第Ⅳ群A類4種はそれらの胴部破片で条痕がなでられる（a）、そのまま（b）である。

第Ⅳ群A類1種は弱く外反する口縁部直下に太い突帯が巡り、突帯と口唇部に指頭による圧痕が施される土器で、口唇部は内外から交互に押圧されて側面が肥厚して波状を呈する。第Ⅳ

群A類２種はそれがヘラ状工具に置き換えられる土器で、これは愛知県上ノ山式土器（吉田富夫・杉原荘介　1937）に特徴で、口唇部が三角形状を呈して突帯が複数で巡る同県入海式土器（中山英司　1955）とは区別される。

第Ⅳ群A類３種は直立する口縁部の口唇部に内側から指頭による爪形が施される土器である。表面は条痕が丁寧になでられて文様は看取されないが、口唇部を意識する施文は愛知県粕畑式土器（吉田富夫他　同）の名残りか、上ノ山貝塚出土土器（増子康真　1976）に粕畑式土器と混在して類似資料をみる。

第Ⅳ群B類１・２種は多量の繊維を含み、器面の表裏に顕著な条痕調整がのこる粗い厚手の赤色を帯びる大形の土器である。第Ⅳ群B類１種はその口縁部で、四方に頂部をもつ波状を呈する口唇部に刻目が施されて、粕畑式土器の影響下の茅山上層式土器が予想される（秋本真澄 1983）。第Ⅳ群B類２種はその胴部破片である。

第Ⅴ群A類１・２種、および第Ⅴ群B類１・２種は厚手で赤色を帯びて第Ⅳ群Ｂ類１・２種に類似するが、繊維を含まないことと、調整を条痕に頼らないこと、で異なる。

第Ⅴ群A類１種は拇指状に外反する口縁部の口唇部に丸棒状工具の側面押圧が連続して施される土器で、黒田向林遺跡に類似資料をみる。そこでは撚糸文が施される土器に同様の手法が施されて、神奈川県田戸式土器群を伴出するから、それにしたがえば第Ⅳ群条痕文が施される土器よりさかのぼる。

第Ⅴ群C類１・２種は胎土が粗く脆弱で乳灰色を帯びる土器で、およそ第Ⅱ群撚糸文が施される土器の無文部、または底部と思われる。底部は田戸式土器群にみられる極端な尖底はとらず、また丸底もない。

Ｃ．石器の内容

石器の貧弱は前述されて、石鏃６点、石斧８点（局部磨製石斧３点）、打痕と磨面をあわせもつもの３点、打痕をもつもの９点を検出、さらに黒曜石剥片11点（22g）、水晶剥片１点（３g）、頁岩剥片550点（10,450g）、砂岩、安山岩等その他石材剥片74点（3,317g）を得た。これは若宮遺跡、黒田向林遺跡をはじめとする本地域の縄文時代早期遺跡における石鏃の優性、それに伴う黒曜石剥片の多量出土といった概念に反しており、前述するように頁岩が卓越する富士川河畔を占有する立地条件をもってしても、今後にその有り方を注目しておきたい（図－12）。

石　鏃（１～５）

石鏃６点中、５点が完形で、いずれも黒曜石製の凹基式で、両面より丁寧な周縁調整がされて、断面も薄い「レンズ」状となっている。基部の抉入形態は点数の割に「⌒」、「∧」、「∩」状とまばらで、形状も１の「長身鏃」、３、４の「三角鏃」、５の「鍬形鏃」と縄文時代早期の特徴的形状にちかくあるが、はっきりしない。とくに４は「∧」状の抉入の中央に豆粒状の

剝離痕を有する信州地方の縄文時代早期石鏃に似るが、これも豆粒状の剝離痕がはっきりせず、5も抉入が鍬形にはとおい。また、岐阜県椛の湖遺跡や長野県樋沢遺跡（戸沢充則　1955）に特徴の局部を磨製されるものもない。

欠損品はE－4グリッド出土で黒曜石製、鍬形鏃様の逆刺部である。

石　斧（6～13）

石斧は8点が確認されるが、うち5点（7、8、11、12、13）が調査区より南東側へ50m程した茶畑一帯で表面採集されたものである。したがって、本調査で縄文中期初頭土器片も確認されるように、遺跡は中期も重複することは間違いなく、それらの帰属は不明にちかい。

6～8の3点は局部磨製される。6は発掘品で、長身の素材端部を調整するだけで、それを両面より磨製して刃部を作出している。他の石斧とは異和を感じ、撚糸文期の礫石斧にちかい形態をみる。7、8は第1次剝片を周縁調整して形状を整え、とくに7は四辺が磨製されて丁寧である。刃部はいずれも横から斜めの方向に研磨され、素材は打製石斧に比べて軟質の砂岩が使用される。

打製石斧（9～13）は「短冊」形で、硬砂岩、安山岩等、硬質石材のためか、3点（9、11、12）が刃部を欠損する。11を除けば、第1次剝片を周縁調整して作出されるが、いずれも粗い。10は基部寄りの側辺が若干くびれて、着装痕であろう「円滑化した磨滅」が観察される。

打痕と磨面をあわせもつ、いわゆる広義の「磨石」（14、15、21）

磨石が磨面と打痕や凹みを併用されることは知れて、これにしたがえば3点が認められ、14が磨面＋打痕、15が磨面＋打痕＋凹みを併用して一般的である。これに対して21は面的な磨面をもたず、長円礫の長軸側辺の一方に打痕、いま一方に平坦的磨面をもち、それに凹みを併用した、いわゆる信州地方でいう「特殊磨石」の機能を備えたものである。

打痕をもつ、いわゆる広義の「凹石」、「敲石」（16～20、22～25）

機能が「敲く」ことを主とするため、対象物によって変化がみられて9点を数えるが、今後は詳細に分類せねばならぬであろう。

16、17は器厚を比較的もった偏平円礫の長軸端部に打痕をもつもので、重量を必要とする連続的な敲打が予想される。18、19、20は偏平円礫の短軸端部に打痕をもって、それらは一面に凹みをもつことで共通している。この機能は前述の21にも言える。これも柔い連続的な敲打がなされ、平面の凹みは浅く、いわゆる縄文時代中期的な「凹み石」の凹みではないため、これも柔い連続的な敲打の結果と思われる。

これに反して22、23、25は縦方向からの強い瞬間的な敲打によるもので、22、23は間接的、25は直接的で「石槌」的な使用が予想される。24は小形の長身偏円礫の端部横に柔い敲打の結果であろう打痕をもつもので、黒田向林遺跡に類似資料が出土している。

紅村　弘　1974　『椛の湖遺跡』　岐阜県恵那郡坂下町教育委員会

吉田富夫　杉原荘介　1937　「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究（１）」
『考古学』８－10
中山英司　1955　『入海貝塚』　愛知県東浦町文化財保存会
増子康真　1976　「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究」『古代人』32　名古屋考古学会
秋本真澄　1983　「箱根西麓採集の縄文早期末葉の土器」『駿豆考古』25
戸沢充則　1955　「樋沢押型文遺跡」『石器時代』２

５．発掘調査の総括　－岳南地域の縄文時代早期前半の様相を予想して－

本地域、いわゆる富士岳南地域における縄文時代早期前半の様相は昭和54年～57年、西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された若宮遺跡、つまり『若宮期』に表象される。ここで得た表裏縄文、縄文、撚糸文、押型文などの土器片は15,000点以上に及び、石鏃2,168点をはじめとする多種多量の石器類、また、それに覆われて竪穴住居跡28基、炉穴跡60基などからなる大規模な集落景観はかって例がなく、従来の常識を覆すに充分な結果であった。

しかし、それに後続する沈線文土器群を伴出する時期、代官屋敷、上石敷、沼久保坂上、それに黒田向林遺跡などが順次、整備、編成されていくなか、若宮遺跡は多岐にわたる内容の複雑さも相まって依然として孤立したまま、暗中模糊の状況にあった。

この時、このたびの静岡県富士土木事務所をはじめ、地元関係諸氏の埋蔵文化財に対する積極的なご理解とご協力をもって実施された県道富士宮芝川線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査、小松原A遺跡で得た成果は前章に記すように多大で待望久しく、若宮遺跡の歴史的価置を助長するに充分に足りるものであった。

以下、ここにその成果を整理、羅列して本地域の縄文時代早期前半の様相を予想しながら本調査のまとめとしたい(図－13)。

それではまず、沈線文土器を伴出する一群を観察して、若宮期の実相をはっきりさせておきたい。

- 押型文が施される土器（以下、押型文土器）は格子目文が明瞭でなくなり、わずかながらの山形文を引きずって楕円文が目立つ。以後、山形文が消滅して楕円文の乱雑、粗大化が始まる。
- 撚糸文が施される土器（以下、撚糸文土器）は走行の断絶、乱走による余白（無施文）・交差部分の格子目化が生じて規則性を欠く。それは縦位に１～２回転後、断絶して横にずれるから、撚糸文本来の垂下の意識も失ってくる。また、大型の格子目、ないしは網目状の撚糸文が発生して、菱形押型文と同化が図られる。
- 縄文が施される土器（以下、縄文土器）または無文の土器（以下、無文土器）は比較的おとなしいが、いずれも上記土器と同様に以下の特徴をもつ。

・口唇部に刺突、押圧による「刻目」が発生して、異系であるはずの高山寺式土器特有の螺施状凹線が撚糸文土器、さらに無文土器まで浸透する。
・これに呼応して口縁部は大きく外反して、その表裏、とくに裏面に施文を意図すればなお、必然的な器形であって、これ、つまり「朝顔」、「チューリップ」状を呈した尖底土器が前段階より連綿としていることに気付く。
・なお、波状口縁の発生、繊維の含入は無論である。

以上をもって、若宮期が後出土器群と画期されるが、適当な併行関係を有する型式、様式（小林達雄　1966）が見当たらず、ここでは多縄文系土器群終末、椛の湖Ⅱ式段階をいま一方の画期として、その間を第Ⅰ～Ⅲ段階に羅列しておきたい。

椛の湖Ⅱ式の段階

本地域の初源である。

・縄文土器は表裏全面、ならびに口唇部におよそLR縄文が施される、いわゆる表裏縄文土器で、器高、口径をほぼ同じくして、丸底から内湾気味に立ち上がり口縁部を拇指状に折る。これが祖形か、以後、口縁端部の肥厚はまったくない。なお、胎土に多量の金雲母を含んで特徴である。
・撚糸文土器は明確でない。

若宮期の第Ⅰ段階

・縄文土器は前段階より継承される表裏縄文が次第に口縁部の表裏（この場合、表面は全面施文である。以下同じ）に集約されて外反もきつくなる。また、口唇部施文に執着して拇指状の口端が角頭状に変化を始める。金雲母の含入は相変らずだが量は減る。
・撚糸文土器はこの段階ではっきりする。これには直立する口縁部の表裏、ならびに口唇部に撚糸文が施されて、施文具（絡条体）の軌道にしたがい鋭角的に外に折れるものと、大形の「砲弾」状尖底で厚く粗く、口唇部が丸頭状を呈して、それと口縁部裏面に施文意識のまったくないものをみる。

　後者の撚糸文は粗くきつく施されて、口縁部を横位に一帯、以下縦位に垂下して特徴で、これが絡条体の斜行による軌跡であることは言うまでもない。なお、口縁部が外反して、おそらく「朝顔」状尖底も登場するが、いずれも繊維を含まないことで共通する。
・押型文土器はおそらく出現していない。

若宮期の第Ⅱ段階

・縄文土器は「朝顔」状尖底が口縁部の表裏、および口唇部の施文を踏襲して、とくに口唇部がはっきりして角頭状がきつくなる。それに厚手で粗い、節、条の大まかな縄文が出現して、縦位に羽状を描出するものもある。

　また、縄文は「砲弾」状尖底に波及して、ついに口縁部裏面にも浸入する。しかし、後述する撚糸文、押型文土器と同様に口唇部施文は拒絶するらしい。施文（表面の施文を言

う。以下同じ）は縦位が一般で、まれに口縁部を横位に、以下、縦位の例もあるが、これらはいずれも繊維を含んで、前段階と区別される。

・撚糸文土器は「朝顔」状尖底がはっきりせず、「砲弾」状尖底を保持して口縁部裏面の施文を許容する。撚糸文は細く、浅く施されて、絡条体が縦位回転するため軌跡が斜行気味となり、その垂下意識が薄れる。また、除々に「手ぬき」もされるらしい。繊維は一様に含まれる。

・押型文土器はこの段階で一気に台頭して縄文、撚糸文土器を超える。格子目文、山形文は相譲らず、楕円文（小粒）が従うが、その先行は明らかでない。

とくに「砲弾」状尖底が目覚ましく、この『「砲弾」状尖底押型文土器』が若宮期の主力で、本地域の特徴的な押型文土器となる。施文は口縁部裏面を横位に一帯、表面を縦位に、が圧倒して縄文、撚糸文土器と同様であり、これがそれらよりの受動の結果であれば、その能動体は前段階に出現する「砲弾」状尖底撚糸文土器か、今後の判断が待たれる。

とすれば、現在、格子目文に限られる「朝顔」状尖底は口唇部施文も手伝って、あくまで信州的色彩（立野）が強く、ひいては近畿地方（神宮寺、大川）との関連まで取り沙汰されてしまう。なお、やはり繊維は含まれて、以後その含入は不変となる。

若宮期の第Ⅲ段階

・縄文土器は「朝顔」状尖底が連綿として、口縁端部の角頭状はなおきつくなる。反面、施文は口唇部に規制がなくなり、口縁部裏面も曖昧となる。表面は縦位に余白をもって下り、一種の帯状効果も生むが、全般的に主体性に欠けて、その余白のあり方は施文の俺怠を感ずる。また、縄文は節、条の大まかなものが器形に引きづられるが、細かなものは目立ず、さらに「砲弾」状尖底は消滅するらしい。

・撚糸文土器はやはり、口縁部一帯（付近）の施文が曖昧となりつつ、絡条体の縦位回転で描出される軌跡の斜行を走行の断絶で修正する行為が現われる。これが余白と相まって帯状効果を意図した、「帯状施文押型土器」の受動形か、いわゆる「手ぬきの方向性」の同類行為か計り知れないが、走行の断絶は撚糸文の垂下意識もなくして横にずれ始めてなお、余白を増す。さらに規制の緩和から乱走も始まる。なお、この「撚糸文の横ずれ施文」はそれ以降、高山寺式段階の撚糸文が施される土器に見出せるから、その出自を探るポイントのひとつとなろう。また、ここでは「砲弾」状尖底の残影もみるが、それはおよそ第Ⅱ段階で消滅して、以後、「朝顔」、「チューリップ」状尖底の全盛となる。

・押型文土器は続いて優位を保ち、極端な強制はないが、伝統の口縁部一帯（付近）の施文でその外反を強めて、さらに衆知の、いわゆる異方向帯状施文が発生して一層信州的色彩（樋沢）を増す。とくにここでは山形文が主体で、一部、格子目文、楕円文が従うが、格子目文が存在を失うのに対して、楕円文は勢いを増して、これ以降、得意の横位密接施文（細久保）で包括していく。

ここで若宮期は終焉をむかえる。しかし、その編成作業はいまここが端緒であって、今後の資料の集積、詳細な観察、修正をおおいに期待しておきたい。

なお、最後になりましたが、調査の完遂に際しまして、ご援助、ご指導をいただきました静岡県富士土木事務所、同県教育委員会、地元関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。

紅村　弘　1974　『椛の湖遺跡』　岐阜県恵那郡坂下町教育委員会

小林　達雄　1966　『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』　多摩ニュータウン遺跡調査会

松島　透　1957　「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4

戸沢　充則　1955　「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2

松沢　亜生　1957　「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4

浦　宏　1936　「紀伊国高山寺貝塚発掘報告」『考古学』10－7

赤星　直忠　1936　「古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて」『考古学』7－9

同　1935　「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』7－6

注1　富士宮市関係縄文時代早期報告書

野村　昭光　1969　「富士宮市大場山出土の縄文土器」『駿豆考古』8

同　1970　「富士宮市代官屋敷遺跡出土遺物について」『駿豆考古』9

小野　真一　1975　「富士周辺における縄文早期の土器」『熱海市ゆずり葉遺跡発掘調査報告書』　加藤学園考古学研究所

富士宮市教育委員会　1982　『代官屋敷遺跡』　日本道路公団名古屋建設局他

同　1983　『若宮遺跡』　日本道路公団名古屋建設局他

同　1985　『上石敷遺跡』

同　1985　『沼久保坂上遺跡』

同　1986　『黒田向林遺跡』

注2　本地域の縄文時代早期前半の様相については、とくに静岡県東部地域から東海、関東、さらに近畿地方と、汎日本的な視野に立った下記の精力的な編成、集成に負うところが大きい。

伊藤　昌光　1983　「第Ⅳ章　調査総括　第1節　遺物の検討　2土器について」『若宮遺跡』日本道路公団名古屋建設局他

関野　哲夫　1988　「東海地方における押型紋段階の様相」『縄文早期を考える―押型文文化の諸問題―』帝塚山考古学研究所

同　1988　「高山寺式土器の編年―その細分と西日本地域との関係について―」『先史考古学研究』1

図　　版

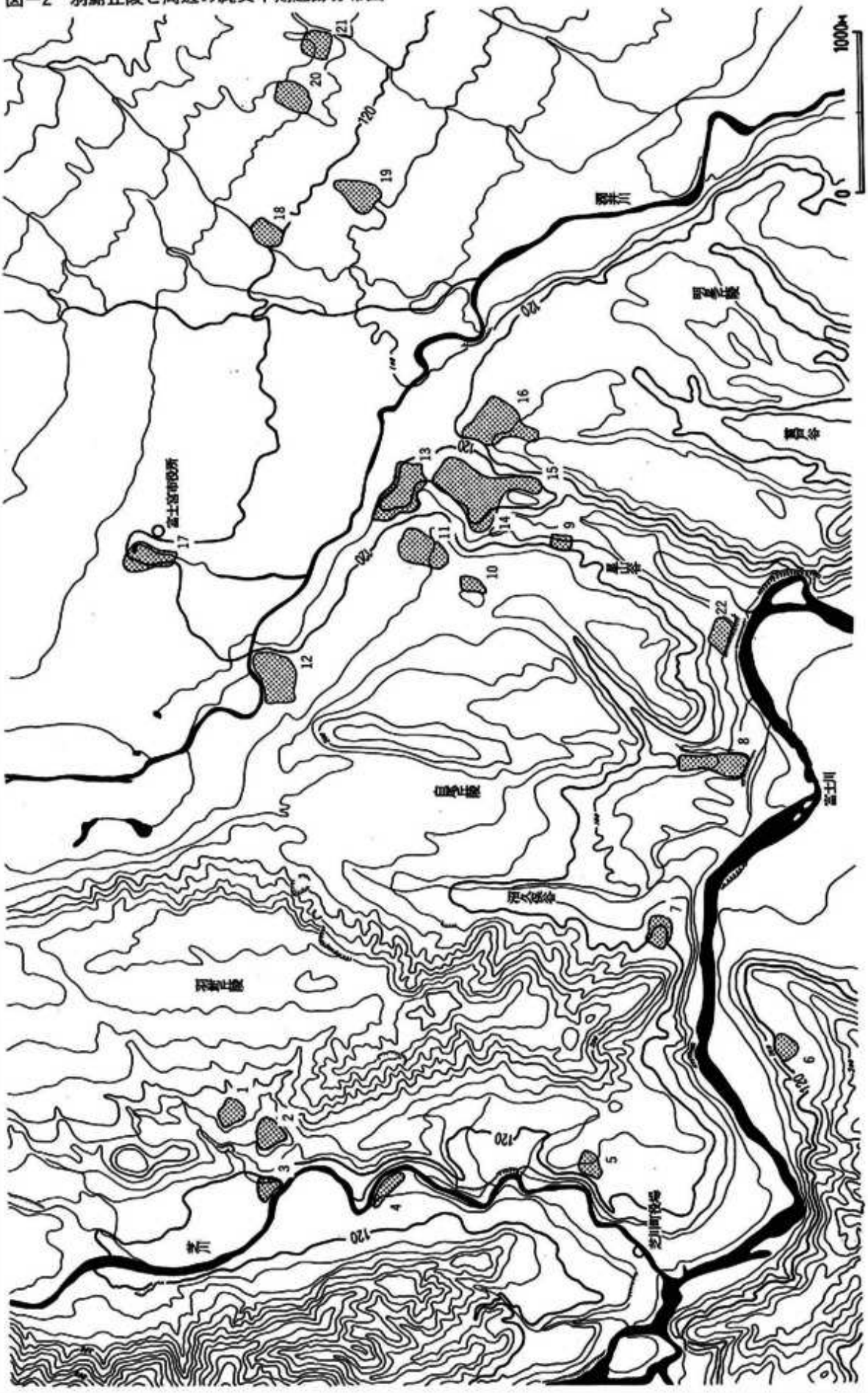
番号	整理No.	遺跡名	所在名	時代	地形	地目	遺跡の状況・遺構・遺物
77	Y－3 H－35	羽衣町	大宮羽衣町	弥生 古墳	平地 台地端部	宅地 工場用地	土器（弥生後期），土師器
82	H－36	西町	大宮西町	古墳	台地上	畑・宅地	土師器
83	H－40	貴船小学校	大宮西町	奈良 平安	平地	宅地	土師器
84	J－70 H－59	甲石	大中里甲石	縄文 古墳	平地	畑・宅地	土器（縄文中～後期）・土師器
85	J－47 H－37	福伝	大中里福伝	縄文 古墳	台地上	畑	土器（縄文後期），土師器
86	J－48 H－38	大中里坂下	大中里坂下 福伝	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文中・後期）・土師器
87	J－49	大中里坂上	大中里坂上	縄文	台地上		土器（縄文中・後・晩期），石剣
90	J－52 Y－5 H－45	別所	安居山別所	縄文 弥生 古墳	山腹 台地上	山林・畑・墓地	土器（縄文後・弥生期）石鏃，打製石斧，土師器，須恵器
91	J－77 H－65	上の原	安居山上の原 中原 大塚	縄文 古墳	台地上	畑・工場用地	土器（縄文中期），土師器
92	K－10	別所1号墳	安居山別所	古墳	台地上		環頭柄頭，大刀身，鐔，統銀玉類，馬具，金環
93	K－11	別所福荷塚古墳（別所2号墳）	安居山別所	古墳	台地端部	原野	円墳，大刀身
94	L－2	摩利支天塚	安居山上の原	江戸	台地上	山林	積石塚
95	S－3 J－54 H－46	沼久保坂上（大塚山）	沼久保坂上	先土 縄文 古墳	台地端部 台地上	山林・畑・宅地	剥片，土器（縄文早・中・後期），打製石斧，石鏃，石匙，土師器
96	J－55 H－47	谷外	沼久保谷外	縄文 古墳	山腹	水田・畑・宅地	土器（縄文中・後期），打製石斧，石匙，石鏃，石錘，石棒，土師器，有孔石錘
97	J－56 H－48	下田	沼久保下田	縄文 古墳	台地端部 台地上	水田・畑	土器（縄文中期），打製石斧，石鏃，石錘，石匙，土師器，有孔石錘
98	J－57	小松原(B)	沼久保小松原	縄文	山腹	山林・畑	土器
99	J－58	小松原(A)	沼久保小松原	縄文	台地上	畑	土器（縄文早・後期），打製石斧，石鏃
100	K－19	蔵塚古墳	沼久保船場	古墳	台地端部	宅地	土師器
104	J－43 H－31	野中中村	黒田中村（野中）	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文中期），土師器
105	J－46 H－34	泉	黒田泉（野中）	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文後期）石鏃・打製石斧，土師器
108	J－45 H－33	滝戸	野中滝戸	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文早・中・後・晩期），石匙，石棒，石錘，石鏃，土偶，打製石斧，硬玉製勾玉，土師器
109	J－44 H－32	野中向原	野中向原	縄文 古墳	山腹	畑・宅地	土器（縄文中～後期）打製石斧，石鏃，土師器
127		黒田向林	黒田向林	縄文	山腹	畑	縄文土器，石器
140		別所蛇塚古墳	安居山別所	古墳	台地端部	宅地	円墳
141		外谷戸	星山外谷戸	縄文	台地上	畑地	縄文土器

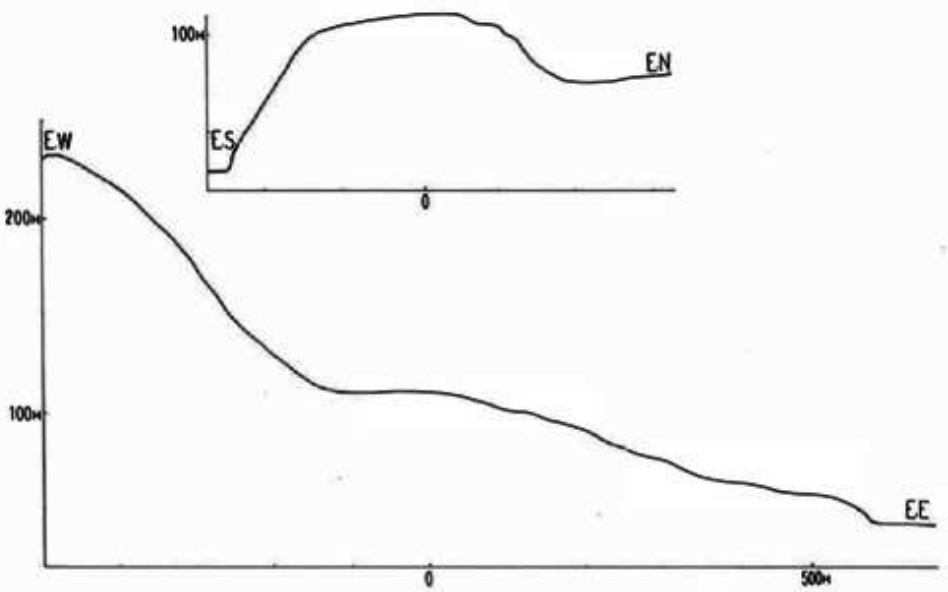
図―1　遺跡位置図（２万分の１）

番号	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	須恵器	中世	近世	遺物	遺構	調査	年代	文献
1	小塚B遺跡	芝川町西山字小塚						△			○		
2	小塚A遺跡	芝川町西山字小塚			△			◎			○	弥生時代、古墳時代	芝川町教育委員会 1972 1978 『（仮称）小塚遺跡第2次調査報告』
3	下稲戸遺跡	芝川町西山字下条									－		
4	大平野B遺跡	芝川町大久保字大平野									－		
5	平野遺跡	芝川町新倉字平野									－		
6	上野遺跡	富士川町北松野字上野			△			△		△		弥生時代	富士川町史編纂委員会 1968 『富士川町史』
7	小松原A遺跡	富士宮市田貫湖字小松原	○	○	○		－				◎	縄文時代	本書参照
8	西久保坂上遺跡	富士宮市田貫湖字坂上		○	○			◎		△	△	縄文時代	富士宮市教育委員会 1986 『西久保坂上遺跡』
9	信楽神社遺跡	富士宮市猪倉字神社									?		
10	黒田小林遺跡	富士宮市黒田字小林		△	◎			○		○	△	弥生時代	富士宮市教育委員会 1986 『黒田小林遺跡』
11	坂地上遺跡	富士宮市猪倉字坂地									－		
12	滝戸遺跡	富士宮市黒田字滝戸			－						－	縄文時代	
13	高畑谷戸遺跡	富士宮市黒田字高畑谷戸			△			○			△	弥生時代～中世	富士宮市教育委員会 1981 『月の橋遺跡』
14	月の橋平遺跡	富士宮市猪倉字月の橋			△			△			△	縄文時代～古墳時代	富士宮市教育委員会 1981 『月の橋遺跡』
15	月の橋上遺跡	富士宮市猪倉字月の橋				－	△	○			○		富士宮市教育委員会 1985 『西久保坂上遺跡』
16	横山城遺跡	富士宮市黒田字横山城			○		△	○		△	○		静岡県教育委員会 1973 『静岡県の城』 富士宮市教育委員会 1984 『西久保坂上遺跡』
17	稲荷大社遺跡	富士宮市稲荷									－		
18	上石田遺跡	富士宮市小泉字石田			△					△	◎	縄文時代、古墳時代	富士宮市教育委員会 1986 『上石田遺跡』
19	上野遺跡	富士宮市小泉字上野									?		
20	代官屋敷遺跡	富士宮市小泉字代官屋敷		△	○		－	○			◎	縄文時代～近世	富士宮市教育委員会 1982 『代官屋敷遺跡』
21	哲学遺跡	富士宮市小泉字哲学窟	△	○	○	◎	◎	△			△	縄文時代～近世	富士宮市教育委員会 1983 『哲学遺跡』
22	小谷沢遺跡	富士宮市猪倉字小谷戸								△			

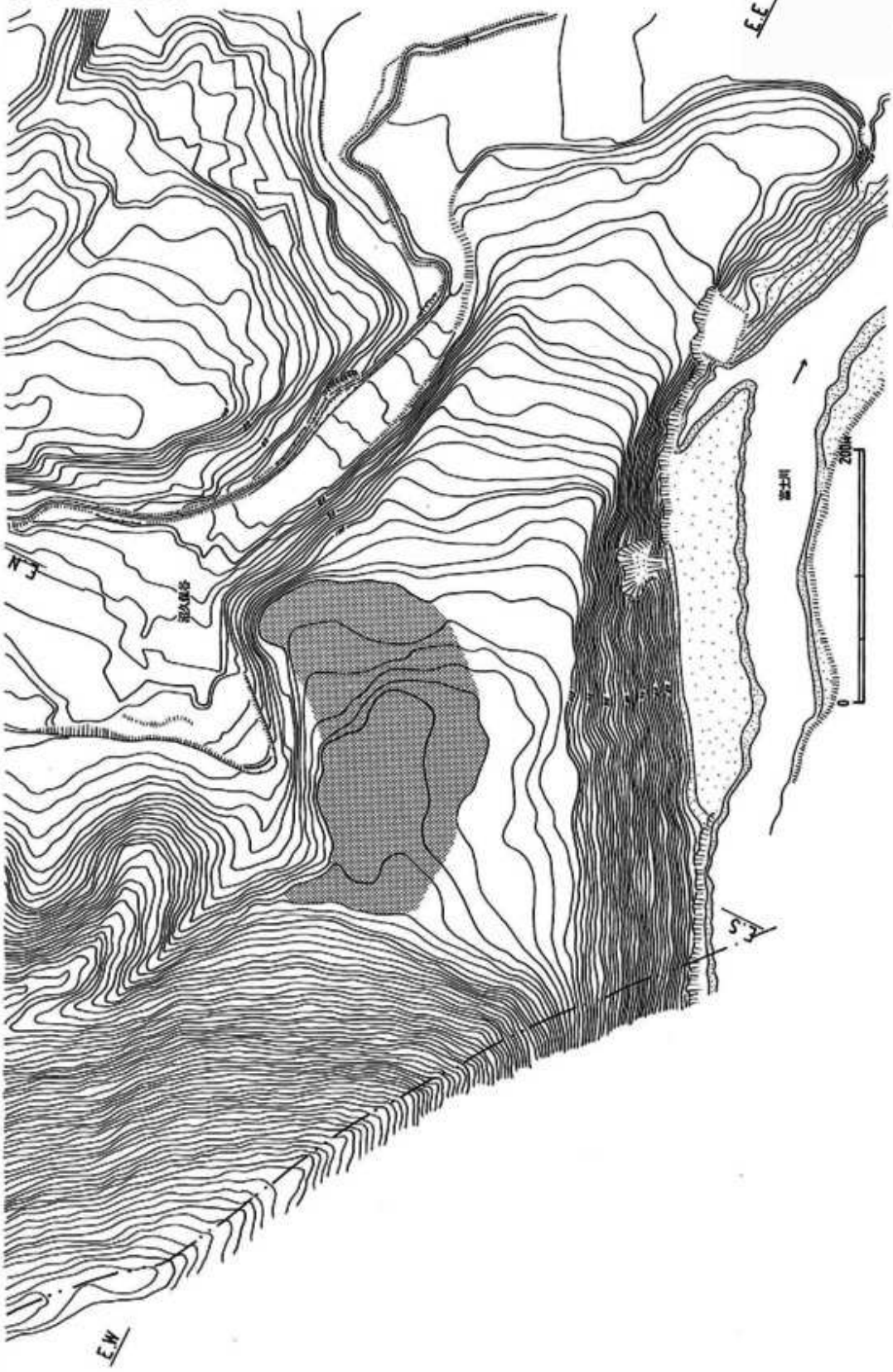
◎ 多
○ 普通
△ 少
－ 稀少

図—2　羽鮒丘陵と周辺の縄文早期遺跡分布図

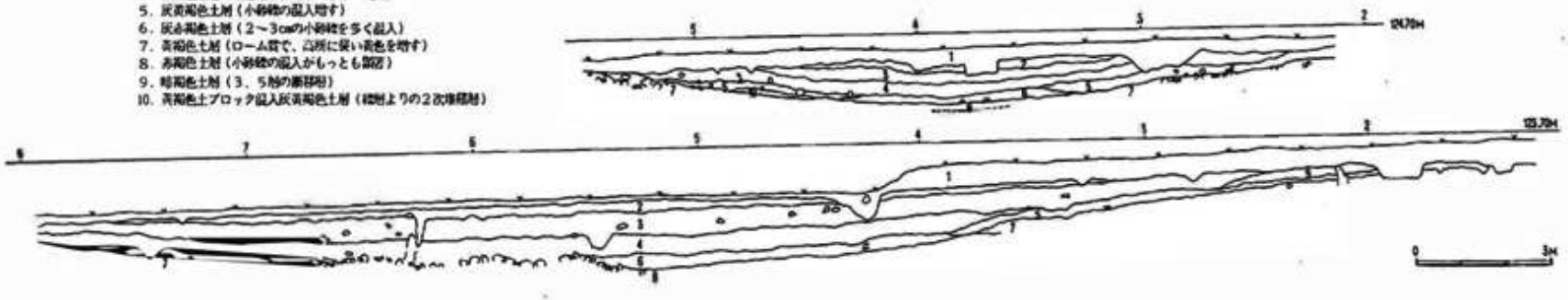



100м
EN
ES
0
EW
200м
100м
EE
0
500м

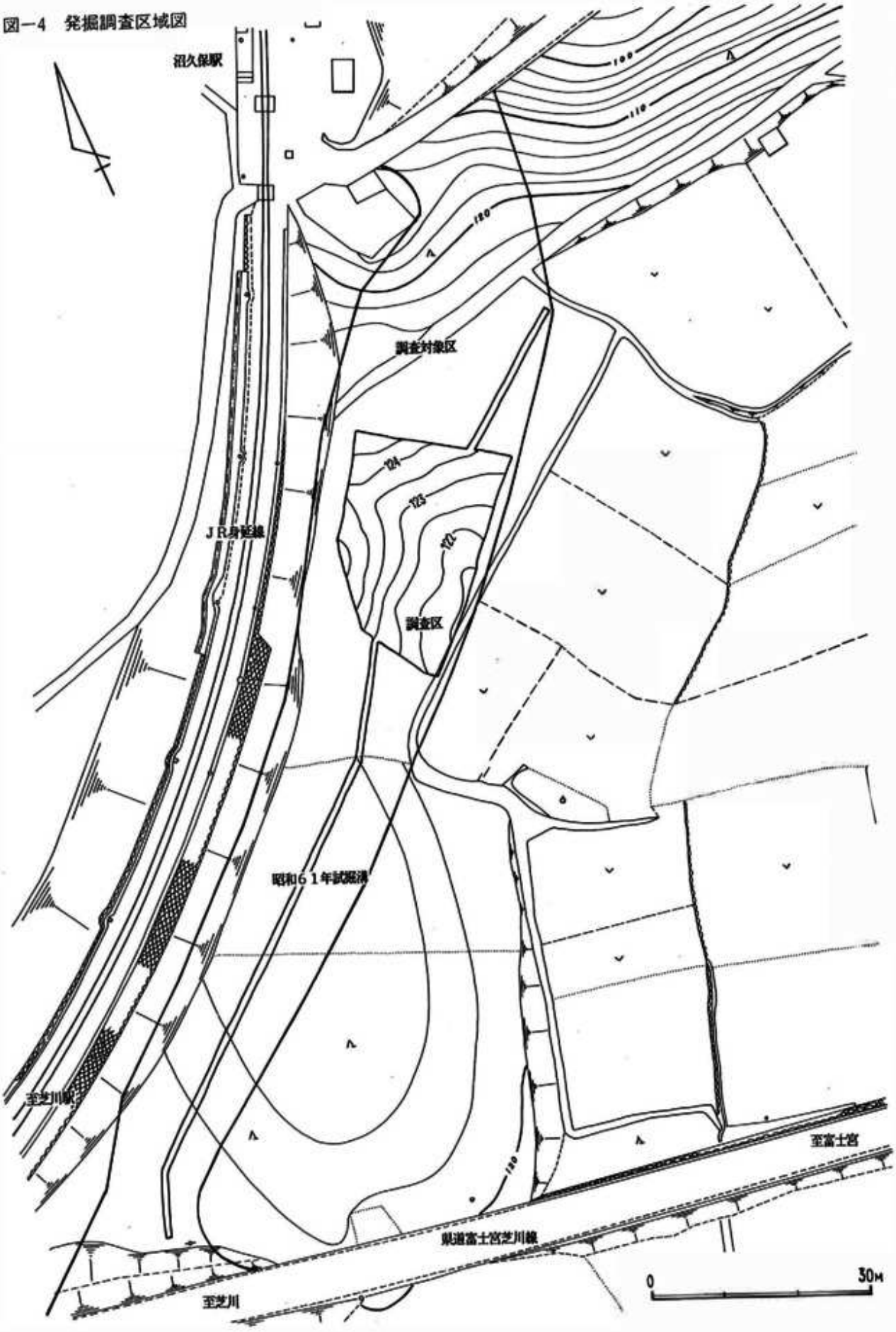
図－3　周辺地形図

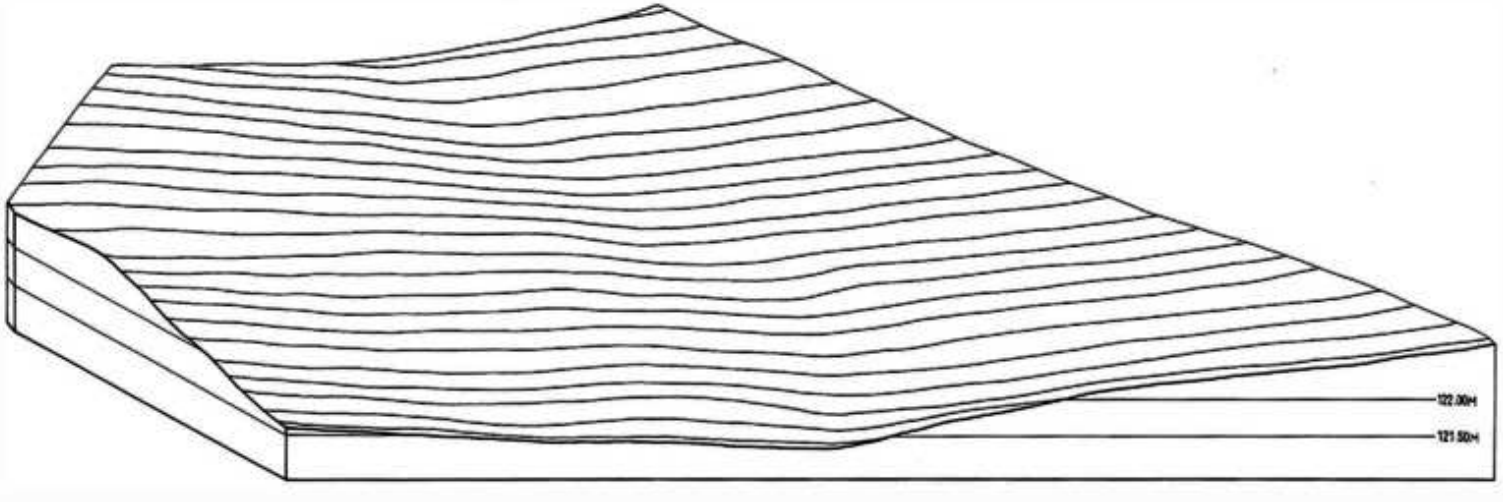


1．表土層（耕作土）
2．大沢ラピリ層（富士マサ）
3．黒褐色土層（粒子粗く、スコリア混入）
4．茶褐色土層（粘性増し、若干の小砂粒混入）
5．灰黄褐色土層（小砂粒の混入増す）
6．灰赤褐色土層（2～3cmの小砂粒を多く混入）
7．黄褐色土層（ローム質で、凸所に従い黄色を増す）
8．赤褐色土層（小砂粒の混入がもっとも顕著）
9．暗褐色土層（3、5層の断部層）
10．黄褐色土ブロック混入灰黄褐色土層（暗層よりの2次堆積層）

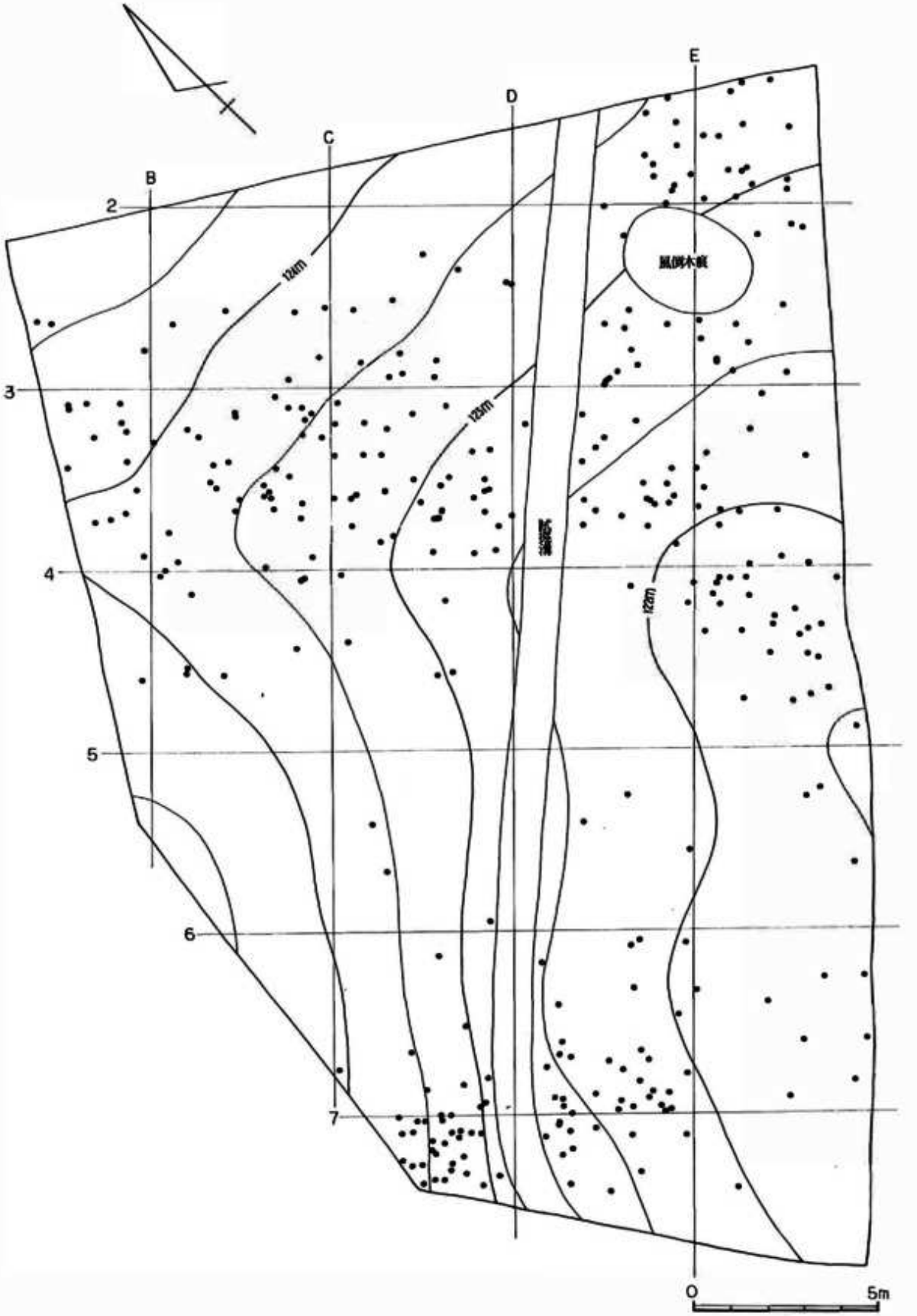


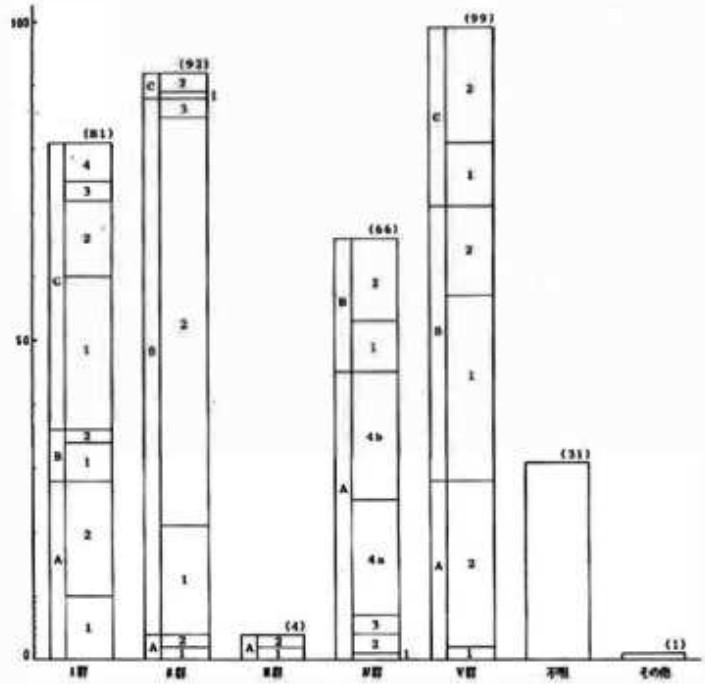
図－4　発掘調査区域図

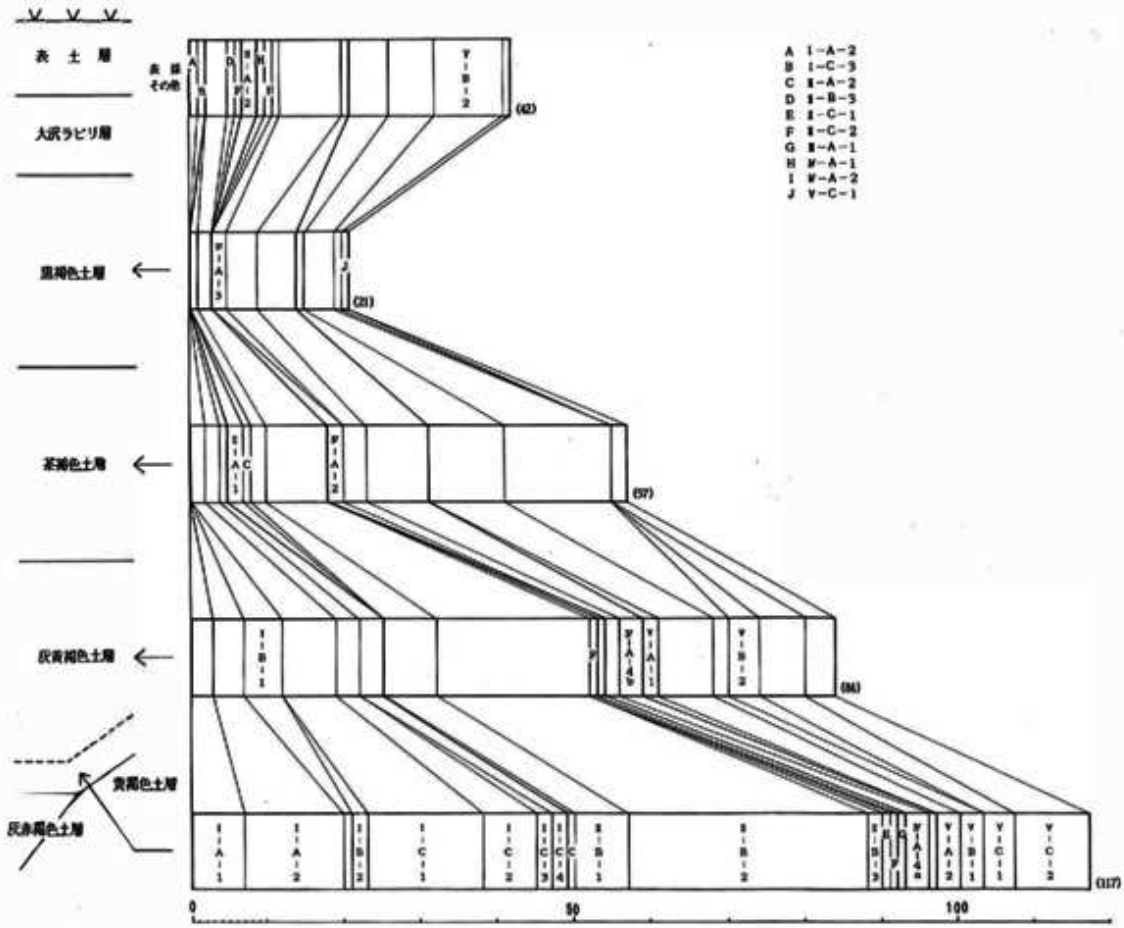

沼久保駅
100
110
120
調査対象区
124
123
122
JR身延線
調査区
昭和61年試掘溝
至芝川駅
至富士宮
120
県道富士宮芝川線
至芝川
0
30M


122.00H
121.50H

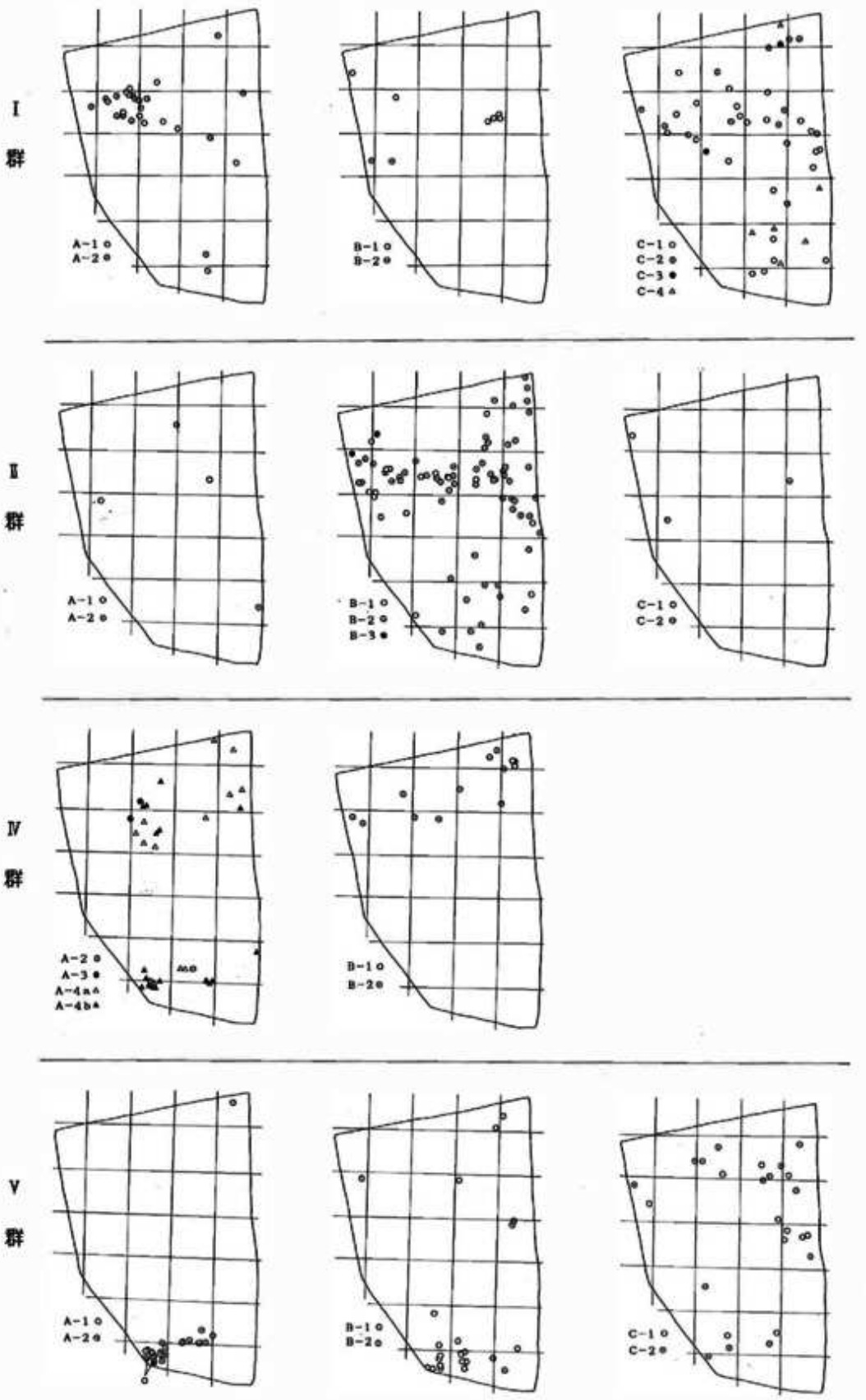
図—5　土器出土状況図




100
50
0
(81)
(92)
(4)
(66)
(99)
(31)
(1)
I群
II群
III群
IV群
V群
不明
その他

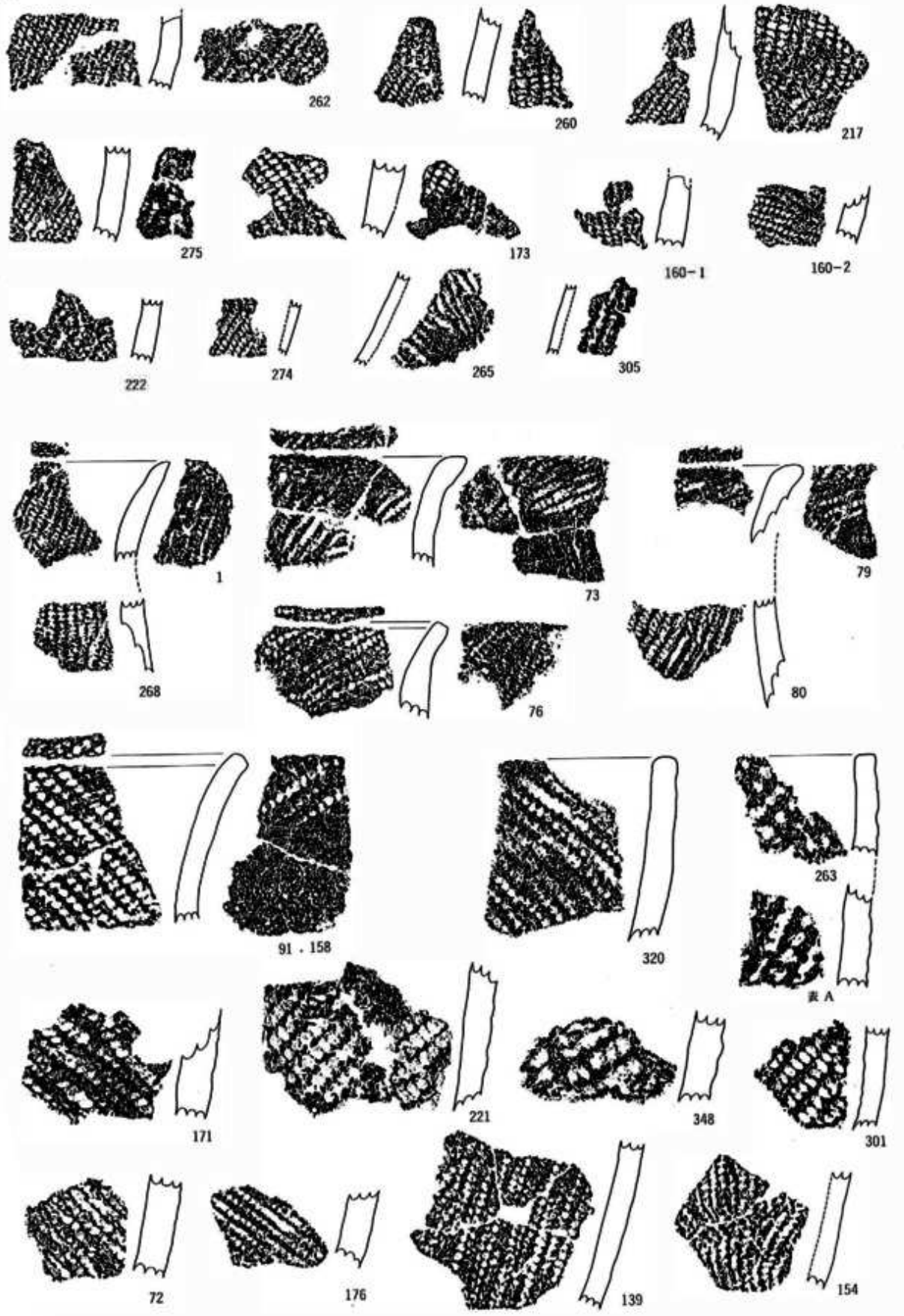

表土層
大沢ラピリ層
黒褐色土層
茶褐色土層
灰黄褐色土層
黄褐色土層
灰赤褐色土層
表層その他
A I-A-2
B I-C-3
C II-A-2
D II-B-3
E II-C-1
F II-C-2
G III-A-1
H IV-A-1
I IV-A-2
J V-C-1
0
50
100

図－6　土器種別出土状況図



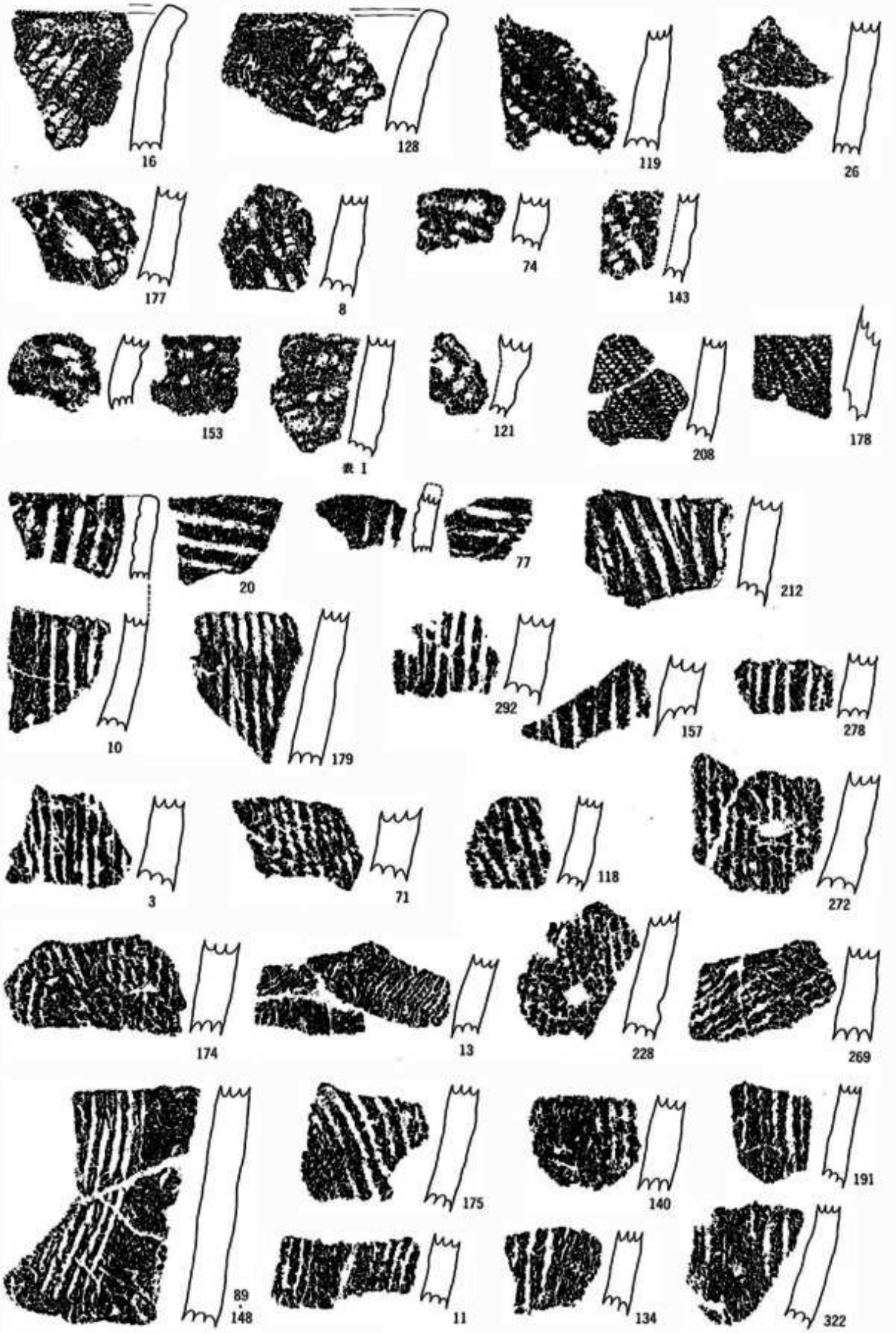
番号	類	種	出土区	部位	文	様	胎	土	色	調（内外）	焼成	備	考
262	Ⅰ群A類	1種	B－2	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		暗赤褐	暗赤褐	不良		
260	Ⅰ群A類	1種	B－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		にぶい赤褐	橙	不良		
217	Ⅰ群A類	1種	C－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		にぶい赤褐	橙	不良		
275	Ⅰ群A類	1種	B－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		暗赤褐	明赤褐	不良		
173	Ⅰ群A類	1種	E－4	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		赤褐	暗赤褐	不良		
160・1	Ⅰ群A類	2種	A－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		赤褐	にぶい橙	不良		
160・2	Ⅰ群A類	2種	A－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		橙	赤褐	不良		
222	Ⅰ群A類	2種	C－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		明赤褐	黒褐	不良		
274	Ⅰ群A類	2種	B－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		――	暗赤褐	不良		
265	Ⅰ群A類	2種	B－3	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		暗赤褐	――	不良		
305	Ⅰ群A類	2種	D－4	胴部	縄文（LR）		多金雲・砂		極暗赤褐	――	不良		
1	Ⅰ群B類	1種	A－2	口縁部	口縁	縄文（LR）	金雲・英・長・砂		明赤褐	橙	良	286と同一	
					表面	縄文（LR）							
					裏面	縄文（LR）							
73	Ⅰ群B類	1種	D－3	胴部	口縁	縄文（LR）	英・長・砂・雲		橙	橙	良	79と同一	
					表面	縄文（LR）							
					表面	縄文（LR）							
79	Ⅰ群B類	1種	D－3	口縁部	口縁	縄文（LR）	英・長・砂・雲		橙	橙	良	73と同一	
					表面	縄文（LR）							
					裏面	縄文（LR）							
268	Ⅰ群B類	1種	B－3	胴部	縄文（LR）		金雲・英・長・砂		明赤褐	橙	良	1と同一	
80	Ⅰ群B類	1種	D－3	胴部	縄文（LR）		英・長・砂・雲		橙	橙	良	79・73と同一	
76	Ⅰ群B類	1種	D－3	口縁部	口縁	縄文（LR）	英・長・砂・金雲		にぶい橙	にぶい橙	良好		
					表面	縄文（LR）							
					裏面	縄文（LR）							
91	Ⅰ群B類	2種	A－4	口縁部	口縁	縄文（LR）	英・長・砂・金雲		にぶい橙	灰褐	良好		
158			B－4		表面	縄文（LR）							
					裏面	縄文（LR）							
320	Ⅰ群C類	1種	E－4	口縁部	縄文（LR）		多砂・雲		にぶい橙	にぶい赤褐	良		
263	Ⅰ群C類	1種	B－3	口縁部	縄文（RL）		多砂		暗赤褐	にぶい赤褐	不良	同一	
表採A	Ⅰ群C類	1種	D－3	胴部	縄文（RL）		多砂		極暗赤褐	暗赤褐	良		
171	Ⅰ群C類	1種	E－4	胴部	縄文（LR）		多砂		極暗赤褐	暗赤黒	不良	上記と胎土近似	
221	Ⅰ群C類	1種	C－3	胴部	縄文（LR）		多砂		灰赤	にぶい赤褐	不良		
348	Ⅰ群C類	1種	D－7	胴部	縄文（LR）		多細砂		橙	橙	良		
301	Ⅰ群C類	1種	B－2	胴部	縄文（RL）		多細砂		灰赤	暗赤褐	良		
72	Ⅰ群C類	1種	D－3	胴部	縄文（LR）		多細砂		にぶい橙	にぶい赤褐	良		
176	Ⅰ群C類	1種	D－5	胴部	縄文（LR）		多砂		灰褐	明褐灰	良		
139	Ⅰ群C類	1種	D－3	胴部	縄文（LR）		多細砂		にぶい橙	にぶい赤褐	良好		
154	Ⅰ群C類	1種	C－4	胴部	縄文（RL）		多細砂		――	にぶい褐	良		

図−7　土器拓影図−1


262
260
217
275
173
160−1
160−2
222
274
265
305
1
73
79
268
76
80
91・158
320
263
表A
171
221
348
301
72
176
139
154

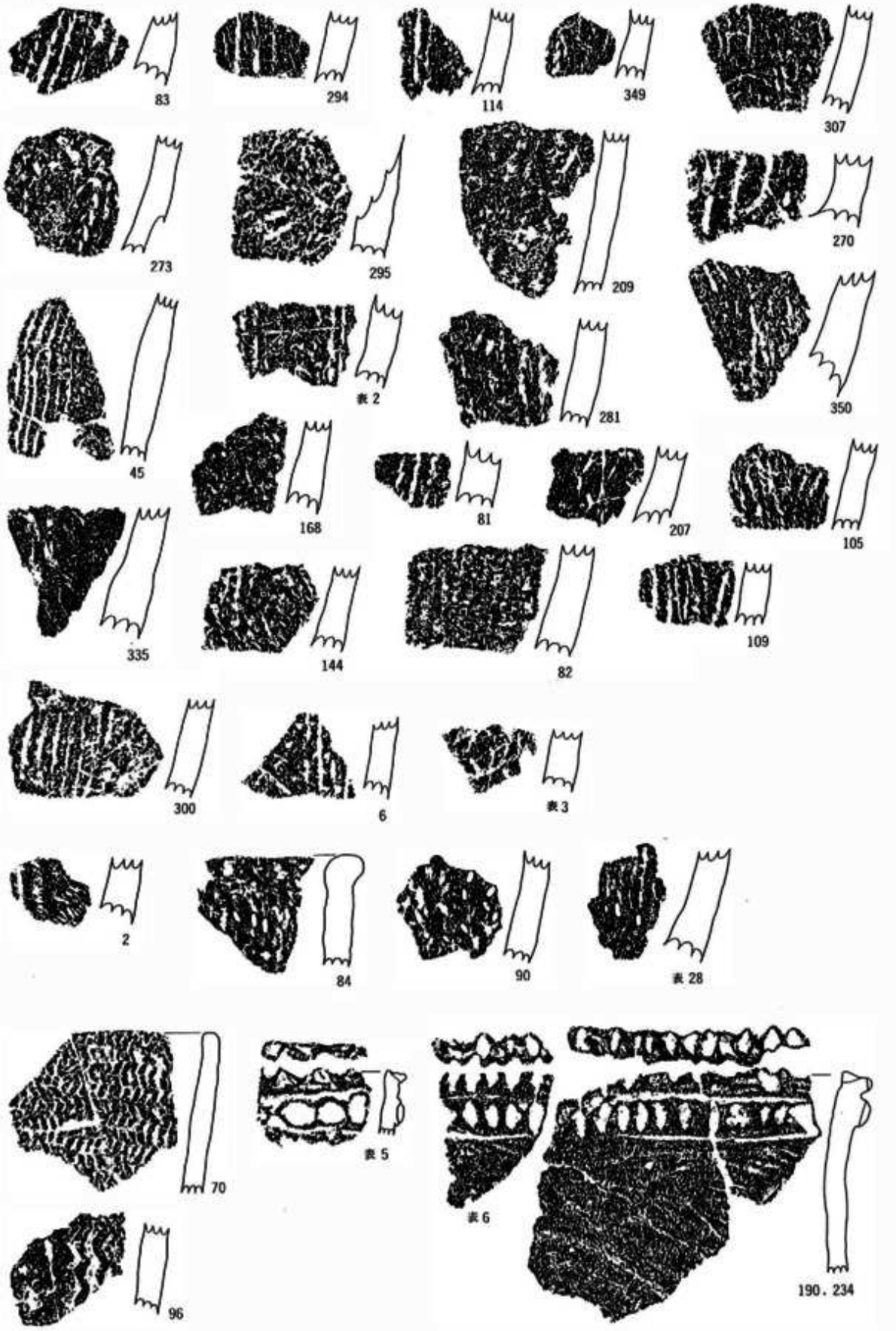
番号	類種	出土区	部位	文様	胎土	色調（内外）		焼成	備考
16	Ⅰ群C類2種	B－3	口縁部	縄文（RL）	粗砂	暗褐	黒	良	
128	Ⅰ群C類2種	E－1	口縁部	縄文（RL）	粗砂	極暗赤褐	灰赤	良	
119	Ⅰ群C類2種	D－2	胴部	縄文（LR）	砂	暗赤褐	灰赤	良	8と近似
26	Ⅰ群C類2種	C－2	胴部	縄文（RL？）	多粗砂	にぶい橙	にぶい赤褐	良	
177	Ⅰ群C類2種	D－5	胴部	縄文（LR）	粗砂	橙	黄橙	不良	
8	Ⅰ群C類2種	A－3	胴部	縄文（RL）	砂	暗赤褐	にぶい赤褐	良	119も近似
74	Ⅰ群C類2種	D－3	胴部	縄文（RL？）	多粗砂・微繊	暗赤褐	にぶい橙	良	128と胎土類似
143	Ⅰ群C類2種	D－3	胴部	縄文（LR）	多粗砂	——	にぶい橙	不良	
153	Ⅰ群C類3種	C－4	胴部	表面 縄文（LR） 裏面 縄文（LR）	多粗砂	明褐	橙	不良	口縁辺？
表採1	Ⅰ群C類3種	——	胴部	縄文（LR？）	多粗砂	赤褐	極暗赤褐	良	同一
121	Ⅰ群C類3種	D－1	胴部	縄文（LR？）	多粗砂	——	極暗赤褐	良	
208	Ⅰ群C類4種	E－6	胴部	縄文（LR）	英・長・砂・雲	にぶい褐	橙	良好	同一
178	Ⅰ群C類4種	E－5	胴部	縄文（LR）	英・長・砂・雲	にぶい褐	橙	良好	
20	Ⅱ群A類1種	B－4	口縁部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	褐	にぶい橙	良	同一 内面タール
77	Ⅱ群A類1種	D－3	口縁部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	にぶい橙	黒褐	良	
10	Ⅱ群A類2種	C－2	胴部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	にぶい褐	にぶい橙	良	
212	Ⅱ群A類2種	E－6	胴部	撚糸文（ℓ）	多粗砂・礫	にぶい褐	暗赤褐	良	
179	Ⅱ群B類1種	E－5	胴部	撚糸文（R）	多砂・少繊	暗赤褐	橙	良好	
292	Ⅱ群B類1種	C－3	胴部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	黒褐	黒褐	不良	
157	Ⅱ群B類1種	B－4	胴部	撚糸文（R）	多砂	赤褐	にぶい赤褐	良	
278	Ⅱ群B類1種	B－3	胴部	撚糸文（R）	長・多細砂・繊	淡橙	にぶい橙	良	
3	Ⅱ群B類1種	A－2	胴部	撚糸文（R）	多粗砂	にぶい赤褐	にぶい橙	良	
71	Ⅱ群B類1種	D－3	胴部	撚糸文（R）	多長・多粗砂	にぶい赤褐	明赤褐	良	
118	Ⅱ群B類1種	D－2	胴部	撚糸文（R）	多粗砂	赤黒	橙	良	
272	Ⅱ群B類1種	B－3	胴部	撚糸文（R）	多粗砂・微繊	にぶい赤褐	灰赤	良	胎土近似
174	Ⅱ群B類1種	E－4	胴部	撚糸文（R）	多粗砂	灰褐	灰褐	良	
13	Ⅱ群B類1種	A－3	胴部	撚糸文（ℓ）	砂	褐	にぶい赤褐	良	
228	Ⅱ群B類1種	C－6	胴部	撚糸文（R）	多粗砂・礫	にぶい橙	灰赤	良	
269	Ⅱ群B類1種	B－3	胴部	撚糸文（R）	多粗砂	暗赤褐	にぶい赤褐	良	
89	Ⅱ群B類2種	E－4	胴部	撚糸文（R）	多粗砂・礫	にぶい褐	褐	良	以下350まで胎土、色調類似
148		E－3							
175	Ⅱ群B類2種	E－4	胴部	撚糸文（R）	多粗砂	暗赤褐	にぶい褐	良	
140	Ⅱ群B類2種	D－3	胴部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	暗褐	にぶい橙	良	
191	Ⅱ群B類2種	C－3	胴部	撚糸文（L）	多粗砂	褐	にぶい褐	良	
11	Ⅱ群B類2種	A－3	胴部	撚糸文（L）	粗砂・少繊	黒褐	暗褐	良	
134	Ⅱ群B類2種	E－1	胴部	撚糸文（L）	多粗砂	暗褐	褐	良	
322	Ⅱ群B類2種	E－5	胴部	撚糸文（ℓ）	多粗砂	にぶい褐	にぶい橙	良	

図－8　土器拓影図－2


16
128
119
26
177
8
74
143
153
表1
121
208
178
20
77
212
10
179
292
157
278
3
71
118
272
174
13
228
269
191
175
140
89
148
11
134
322

番号	類	種	出土区	部位	文	様	胎	土	色	調（内外）	焼成	備	考
83	Ⅱ群B類	2種	E－3	胴部	撚糸文（R）		多粗砂・繊		にぶい橙	にぶい赤褐	良		
294	Ⅱ群B類	2種	C－3	胴部	撚糸文（R）		多粗砂・繊		暗赤褐	にぶい赤褐	良		
144	Ⅱ群B類	2種	D－2	胴部	撚糸文（R？）		多粗砂		灰赤	にぶい赤褐	良		
349	Ⅱ群B類	2種	D－7	胴部	撚糸文（L）		多粗砂		暗赤褐	灰赤	良		
307	Ⅱ群B類	2種	E－4	胴部	撚糸文（γ条線状？）		多粗砂		極暗赤褐	暗赤褐	良	273と胎土，色調とくに近似	
273	Ⅱ群B類	2種	B－3	胴部	撚糸文（R）		多粗砂		暗赤褐	暗赤褐	良		
295	Ⅱ群B類	2種	C－3	胴部	撚糸文（L）		多粗砂		にぶい橙	にぶい赤褐	不良		
209	Ⅱ群B類	2種	E－6	胴部	撚糸文（L）		多粗砂		暗赤褐	灰赤	良		
270	Ⅱ群B類	2種	B－3	胴部	撚糸文（R）		多粗砂		灰赤	暗赤灰	不良	底部近	
350	Ⅱ群B類	2種	D－7	胴部	撚糸文（L？）		多粗砂・繊		灰赤	にぶい橙	良	実底近	
145	Ⅱ群B類	2種	D－3	胴部	撚糸文（R）		多砂		灰赤	灰赤	良	以下207まで胎土・色調類似	
表 2	Ⅱ群B類	2種	表 採	胴部	撚糸文（R）		多砂		にぶい橙	灰褐	良		
281	Ⅱ群B類	2種	B－3	胴部	撚糸文（L）		多砂・少繊		灰赤	灰褐	良		
335	Ⅱ群B類	2種	E－6	胴部	撚糸文（ℓ）網目状		多砂・繊		灰赤	灰赤	良	207と同一	
168	Ⅱ群B類	2種	E－4	胴部	撚糸文（R？）		多砂		灰褐	灰赤	良		
81	Ⅱ群B類	2種	D－3	胴部	撚糸文（L）		多砂・微繊		灰赤	灰赤	良		
207	Ⅱ群B類	2種	D－6	胴部	撚糸文（ℓ）網目状		多砂・繊		灰赤	灰赤	良	335と同一	
105	Ⅱ群B類	2種	E－2	胴部	撚糸文（R）		多粗砂		にぶい橙	にぶい橙	良	以下82まで胎土・色調類似	
144	Ⅱ群B類	2種	D－3	胴部	撚糸文（R）		多粗砂		にぶい橙	橙	良		
82	Ⅱ群B類	2種	E－3	胴部	撚糸文（剥落不明）		多粗砂		にぶい橙	橙	良好		
109	Ⅱ群B類	2種	E－2	胴部	撚糸文（R）		多粗砂		にぶい橙	赤褐	良		
300	Ⅱ群B類	3種	B－2	胴部	撚糸文（R）		英・長・砂・金雲		褐	橙	良好	同一	
6	Ⅱ群B類	3種	A－3	胴部	撚糸文（R）		英・長・砂・金雲		褐	橙	良好		
表 3	Ⅱ群B類	3種	B－2	胴部	撚糸文（R）		英・長・砂・金雲		褐	橙	良好		
2	Ⅱ群C類	1種	A－2	胴部	結条体圧痕文（ℓ）		粗砂		にぶい褐	明黄	良好		
84	Ⅱ群C類	2種	E－3	口縁部	結条体圧痕文（γ）		砂・繊		にぶい赤褐	明赤褐	良	表28と同一	
90	Ⅱ群C類	2種	B－4	胴部	結条体圧痕文（γ）		粗砂		にぶい褐	にぶい赤褐	良		
表 28	Ⅱ群C類	2種	D－5	胴部	結条体圧痕文（γ）		砂・繊		にぶい橙	褐	良	84と同一底部近	
70	Ⅲ群A類	1種	D－3	口縁部	押型文（山形）		細砂		灰赤	灰褐	良		
96	Ⅲ群A類	2種	D－2	胴部	押型文（山形）		砂・繊		にぶい橙	にぶい橙	良	帯状施文	
表 5	Ⅳ群A類	1種	表 採	口縁部	条痕十突帯（指頭圧痕）		粗（英・長・砂）多繊		明赤褐	にぶい褐	良好		
190	Ⅳ群A類	2種	D－6	口縁部	条痕十突帯（刻目）		粗（英・長・砂）多繊		にぶい橙	にぶい黄橙	良好	同一	
234			C－6										
表 6	Ⅳ群A類	2種	表 採	口縁部	条痕十突帯（刻目）		粗（英・長・砂）多繊		にぶい黄橙	浅黄橙	良好		

図—9　土器拓影図—3


83
294
114
349
307
273
295
209
270
45
表2
281
350
168
81
207
105
335
144
82
109
300
6
表3
2
84
90
表28
70
表5
表6
96
190．234

番号	類	種	出土区	部位	文	様	胎	土	色	調（内外）		焼成	備	考
表 5	Ⅳ群A類1種		表 採	口縁部	条痕十突帯（指頭圧痕）		粗（英・長・砂）多織		明赤褐		にぶい褐	良好		
190	Ⅳ群A類2種		D－6	口縁部	条痕十突帯（刻目）		粗（英・長・砂）多織		にぶい橙		にぶい黄橙	良好		
234			C－6											同一
表 6	Ⅳ群A類2種		表 採	口縁部	条痕十突帯（刻目）		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		浅黄橙	良好		
19	Ⅳ群A類3種		B－3	口縁部	条痕（口唇部頭刻目）		英・長・砂・多織		にぶい赤褐		にぶい橙	良好		
表 7	Ⅳ群A類3種		表 採	口縁部	条痕（口唇部頭刻目）		英・長・砂・多織		にぶい橙		にぶい褐	良好		同一
34			C－2											
100	Ⅳ群a類4種a		表 採	胴部	条痕		英・長・砂・多織		浅黄橙		にぶい黄橙	良好	以下，53まで	
38	Ⅳ群A類4種a		D－1	胴部	条痕		英・長・砂・多織		にぶい黄橙		にぶい黄褐	良好	ⅣA3と胎土	
表 9	Ⅳ群A類4種a		表 採	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		にぶい黄橙	良好	色調同じ	
表 10			表 採								～褐			
142	Ⅳ群A類4種a		D－3	胴部	条痕		英・長・砂・多織		黄橙		にぶい黄橙	良好		
表 8	Ⅳ群A類4種a		表 採	胴部	条痕		英・長・砂・多織		にぶい黄橙		にぶい橙	良好		
55	Ⅳ群A類4種a		C－3	胴部	条痕		英・長・砂・多織		橙		にぶい橙～褐	良好		
53	Ⅳ群A類4種a		C－3	胴部	条痕		英・長・砂・多織		橙		にぶい橙～褐	良好		
337	Ⅳ群A類4種b		C－7	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		浅黄	良好	以下，32まで	
245	Ⅳ群A類4種b		C－7	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		灰黄褐	良好	ⅣI・2と胎土	
232	Ⅳ群A類4種b		C－6	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		にぶい黄橙	良好	色調同じ	
50	Ⅳ群A類4種b		E－2	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		にぶい橙	良好	補修孔	
27	Ⅳ群A類4種b		C－2	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		浅黄		にぶい橙	良好		
31	Ⅳ群A類4種b		C－2	胴部	条痕		粗（英・長・砂）多織		にぶい黄橙		にぶい橙	良好		
32			C－2											

図－10　土器拓影図－4

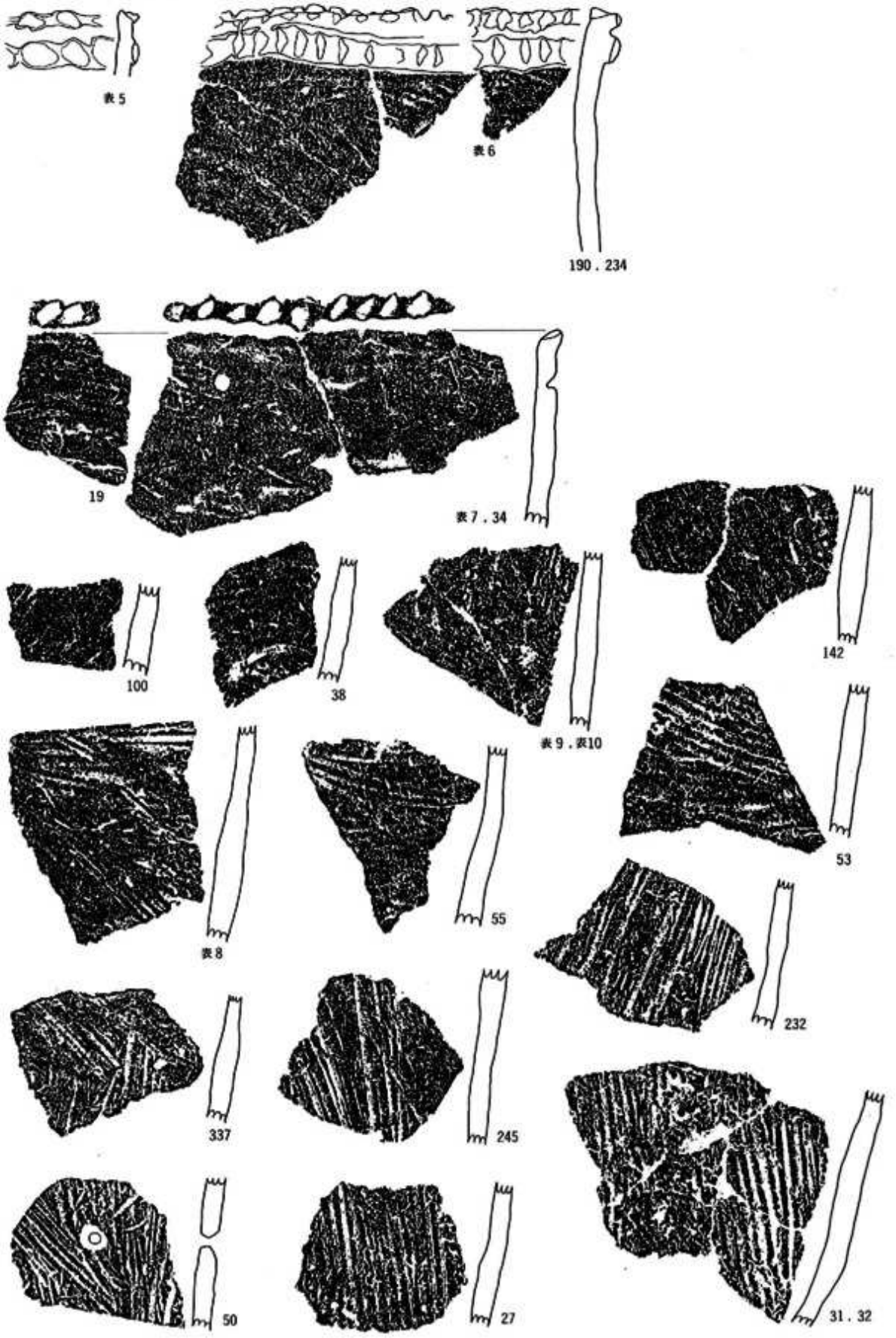
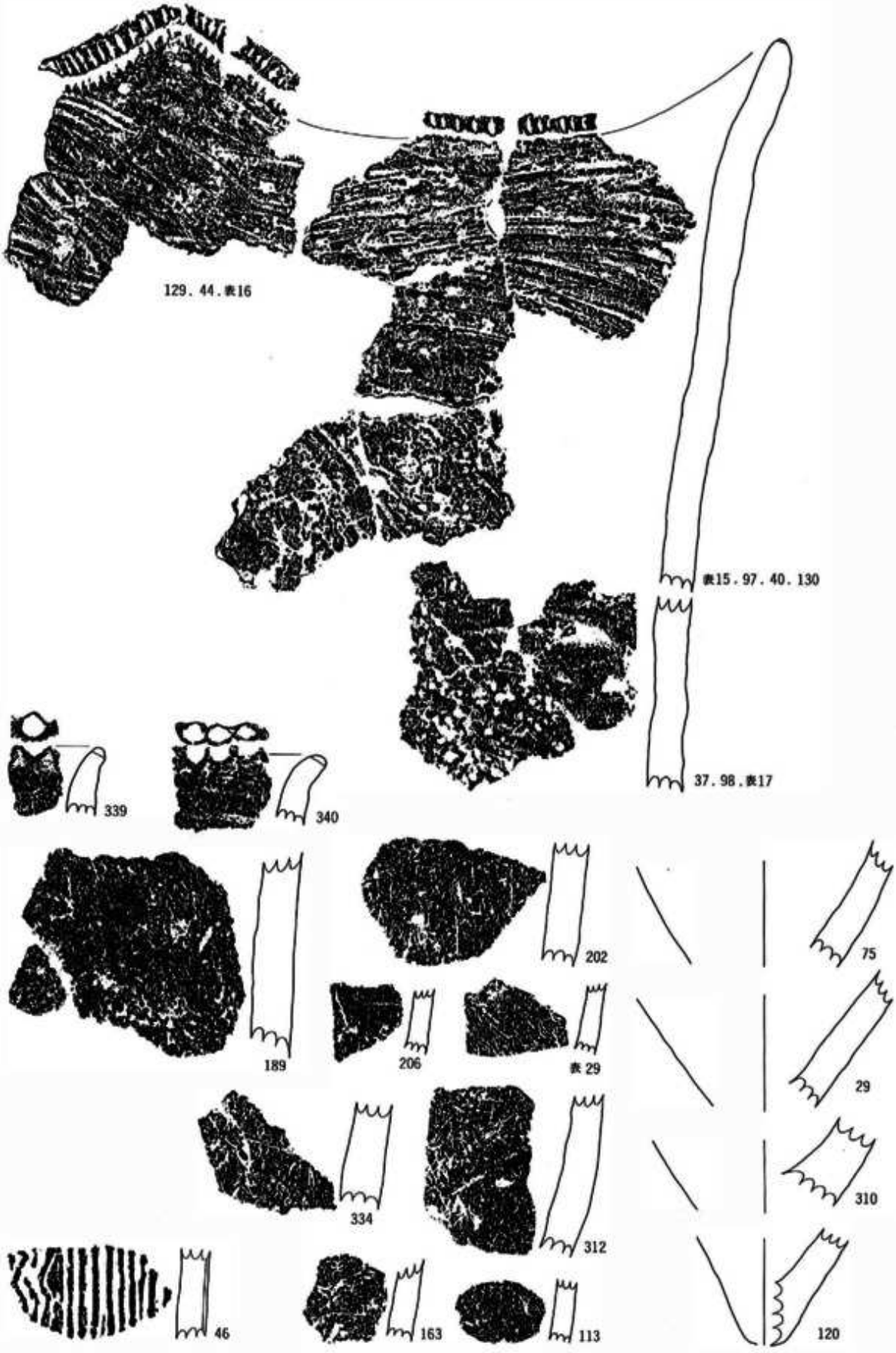


表5
表6
190．234
19
表7．34
100
38
表9．表10
142
表8
55
53
232
337
245
50
27
31．32

一番号	類	種	出土区	部位	文	様	胎	土	色	調（内外）	焼成	備	考
129	Ⅳ群B類	1種	E－1	□縁部	条痕（□横刻目）		多相砂・多雲		褐	赤褐	良	以下，表17まで同一個体	
44			E－1	□縁部									
表 16			表 採	胴 部									
表 15	Ⅳ群B類	1種	表 採	□縁部	条痕（□横刻目）		多相 砂・多雲		赤褐～褐	赤褐	良		
97			D－2	□縁部									
40			D－2	胴 部									
130			E－1	胴 部									
37	Ⅳ群B類	2種	D－1	胴 部	条痕		多相 砂・多雲		褐	赤褐	良		
98			D－2	胴 部									
表 17			表 採	胴 部									
339	Ⅴ群A類	1種	C－7	□縁部	——（□棒丸棒工具連続押圧）		多雲 砂・雲		褐	暗褐	良	同一	
340	Ⅴ群A類	1種	C－7	□縁部	——（□棒丸棒工具連続押圧）		多相 砂・雲		赤褐	暗赤褐	良		
189	Ⅴ群A類	2種	D－6	胴 部	————		多相 砂 雲		にぶい橙	赤褐	良		
202	Ⅴ群B類	1種	D－7	胴 部	————		多相砂・雲		にぶい黄褐	赤褐	良		
206	Ⅴ群B類	2種	D－7	胴 部	————		多砂		黒褐	にぶい橙	良		
表 29	Ⅴ群B類	2種	表 採	胴 部	————		多（砂・英・長・雲）		にぶい赤褐	にぶい橙	良好	胎土密	
334	Ⅴ群C類	1種	D－6	胴 部	————		粗 砂		明褐灰	明褐灰	良		
312	Ⅴ群C類	1種	E－4	胴 部	————		多粗 砂（極）		褐灰	灰黄褐	良	29 と胎土近似	
75	Ⅴ群C類	1種	D－3	底 部	————		多相 砂		灰黄褐	灰黄	良		
29	Ⅴ群C類	1種	C－2	底 部	————		多粗 砂（極）		褐灰	褐灰	良	31 2と胎土近似 3	
310	Ⅴ群C類	1種	E－4	底 部	————		多雲 砂		にぶい褐	灰褐	良		
120	Ⅴ群C類	1種	D－2	底 部	————		多粗 砂		灰褐	灰黄褐	良		
163	Ⅴ群C類	2種	A－3	胴 部	————		多粗 砂		灰黄褐	にぶい黄橙	良		
113	Ⅴ群C類	2種	D－2	胴 部	————		多砂		灰黄褐	明 黄褐	良		
46	五領ヶ台	1式	E－2	胴 部		半截竹管平行沈線文	多砂		黒褐	橙～褐	良好		

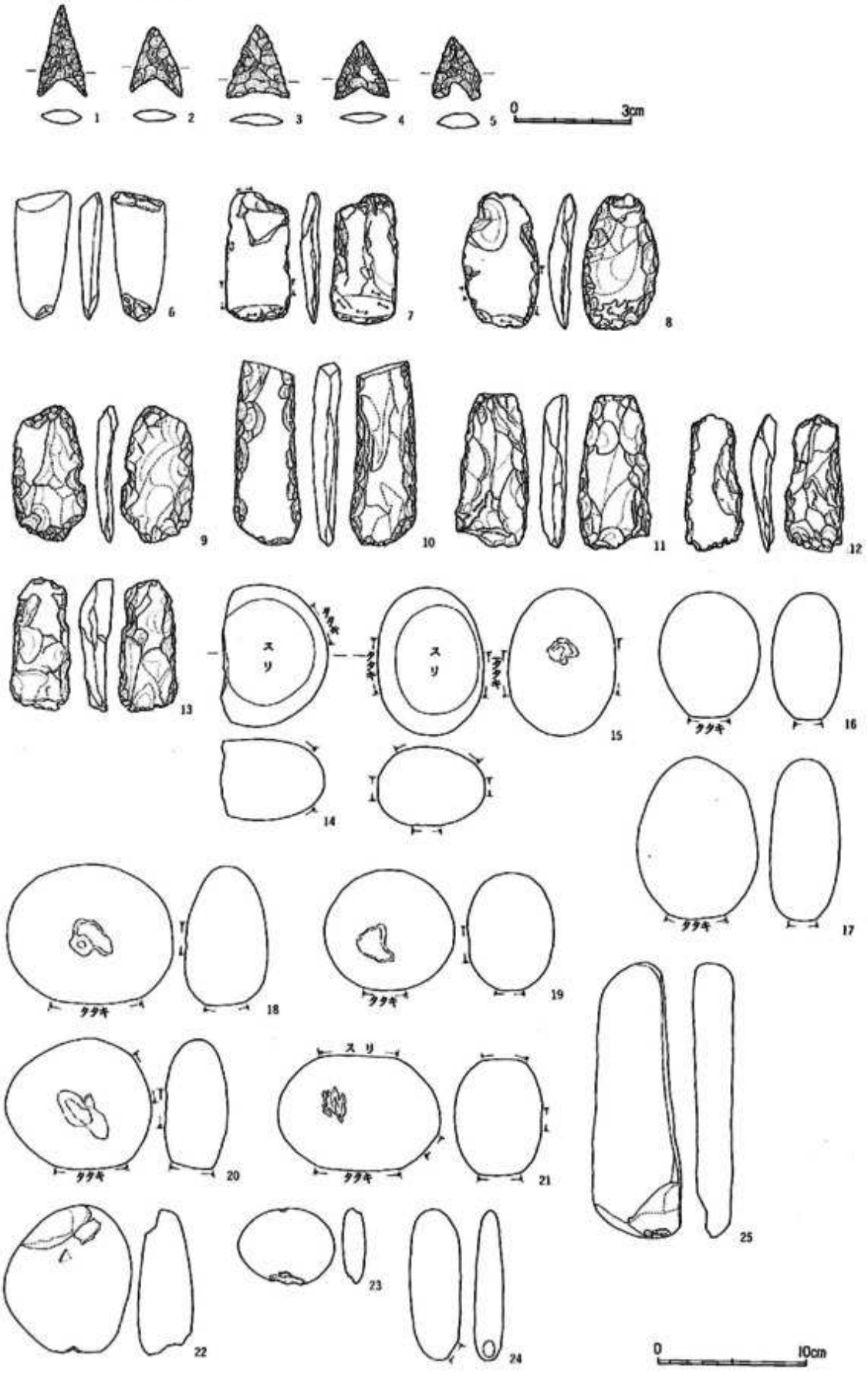
図−11　土器拓影図−5

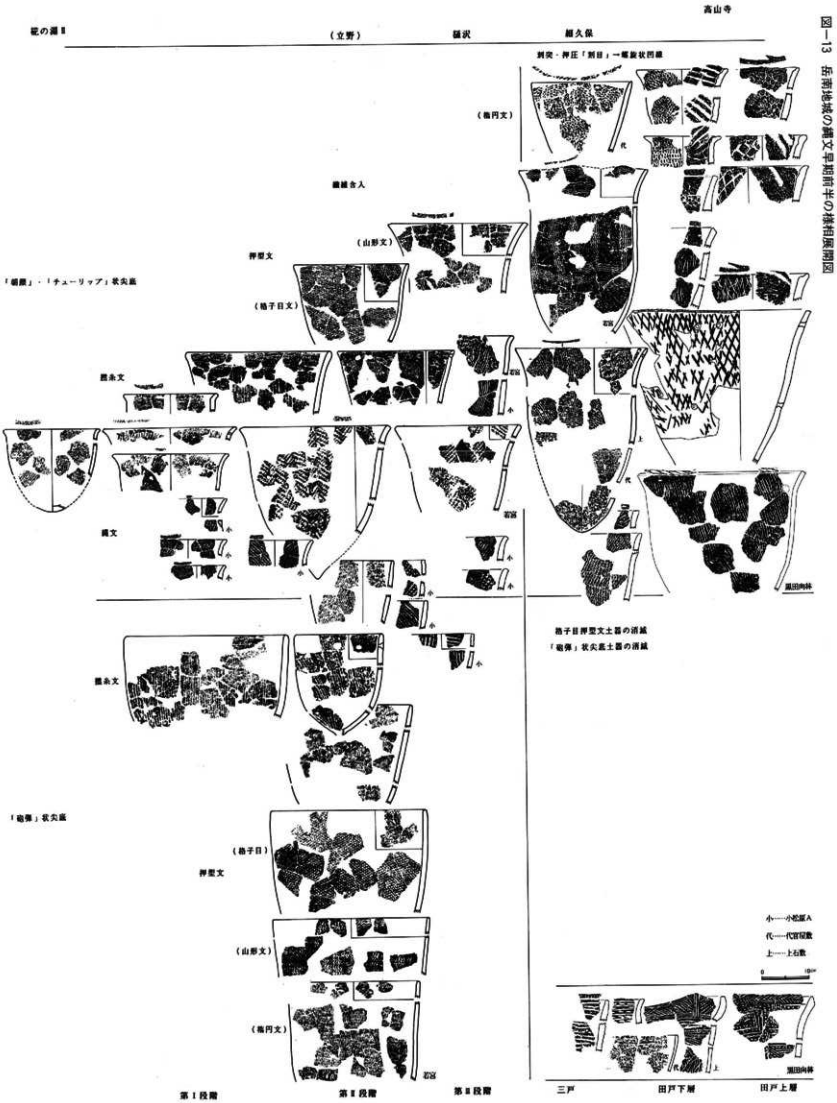

129. 44. 表16
表15. 97. 40. 130
37. 98. 表17
339
340
189
202
206
表29
75
29
310
334
312
46
163
113
120

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	備考
1		D－2	黒曜石	22.2	11.9	4.3	0.6	完形	
2		D－4	黒曜石	17.4	13.5	3.4	0.5	完形	
3		確認調査	黒曜石	18.1	16.3	3.0	0.6	完形	D－6辺
4		E－6	黒曜石	13.7	13.4	2.4	0.3	完形	
5		E－6	黒曜石	15.7	12.3	3.5	0.5	完形	
6		E－4	砂岩	(84.9)	35.5	14.6	68	基部½欠	刃部磨製
7		表採	砂岩	86.2	44.5	12.3	65	基端½欠	刃部磨製
8		表採	砂岩	89.0	50.6	14.0	82	略完形	刃部磨製
9		表土	安山岩	(91.1)	48.3	11.1	60	刃部欠	
10		表土	砂岩	(121.1)	45.8	18.1	126	基部欠	
11		表採	硬砂岩	(103.2)	49.0	15.4	102	刃部欠	
12		表採	硬砂岩	91.0	39.4	16.3	58	略完形	
13		表採	硬砂岩	(87.2)	41.4	20.2	73	刃部欠	
14		表土	砂岩	95.2	(71.0)	56.6	563	½欠	
15		E－3	砂岩	98.7	72.6	51.8	549	完形	
16		D－3	安山岩	85.0	60.2	46.7	391	完形	
17		E－3	安山岩	109.3	82.2	47.0	602	完形	
18		E－3	斑岩	112.0	92.5	55.1	843	完形	
19		E－4	雑岩	86.8	81.1	60.4	587	完形	
20		確認調査	砂岩	97.2	86.5	44.4	528	完形	
21		C－3	砂岩	108.8	75.9	59.4	759	完形	
22		C－3	砂岩	(99.8)	82.7	36.2	403	略完形	
23		C－3	砂岩	63.9	(50.2)	15.6	71	略完形	
24		C－3	砂岩	90.8	33.2	20.5	94	完形	
25		A－3	雑岩	(184.8)	59.5	28.2	518	略完形	

※ 表採は調査区より南へ50m程したところのものである

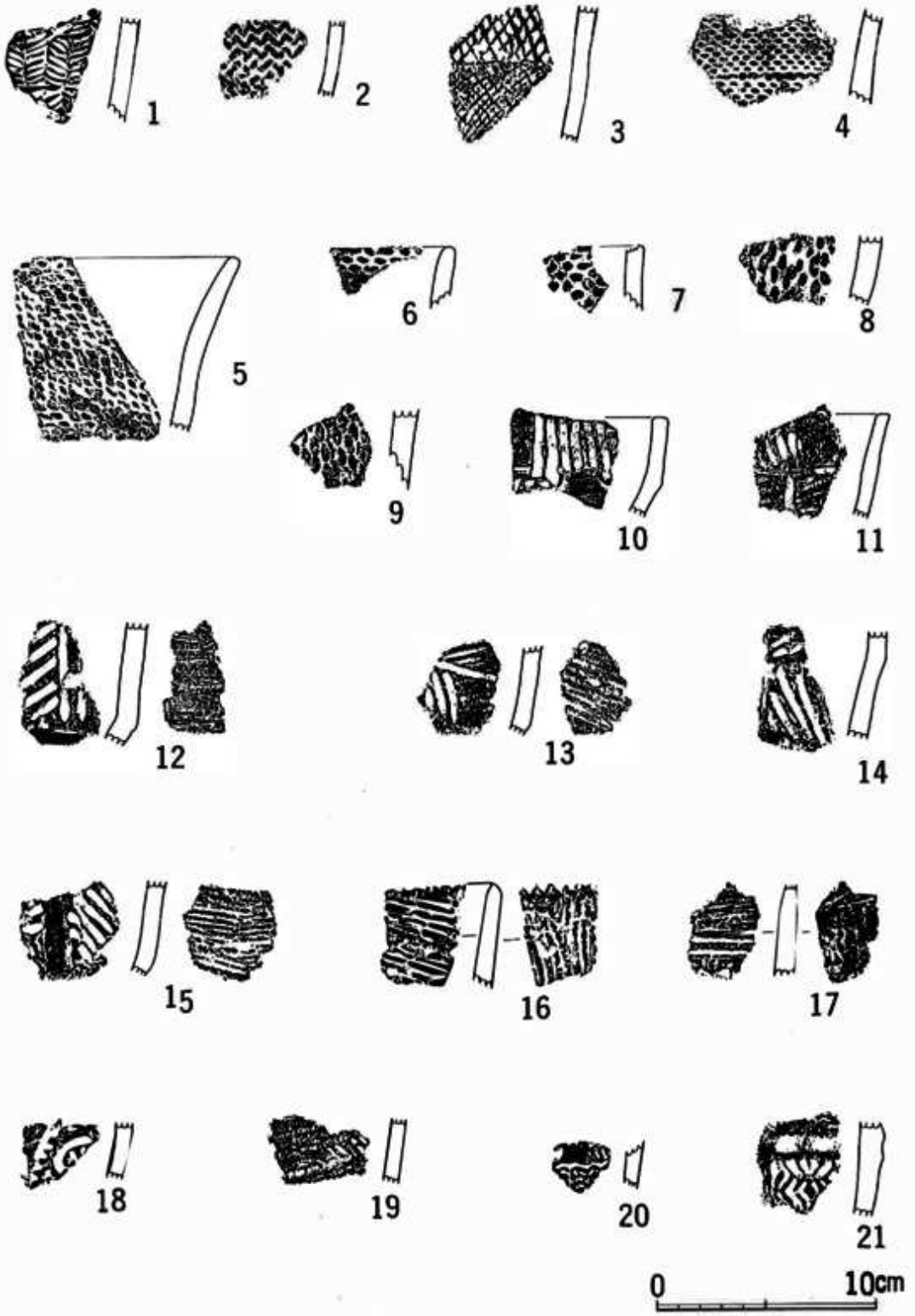
図−12　石器実測図


1
2
3
4
5
0
3cm
6
7
8
9
10
11
12
13
スリ
タタキ
スリ
タタキ
15
タタキ
16
14
タタキ
17
タタキ
18
タタキ
19
タタキ
20
スリ
タタキ
21
25
22
23
24
0
10cm

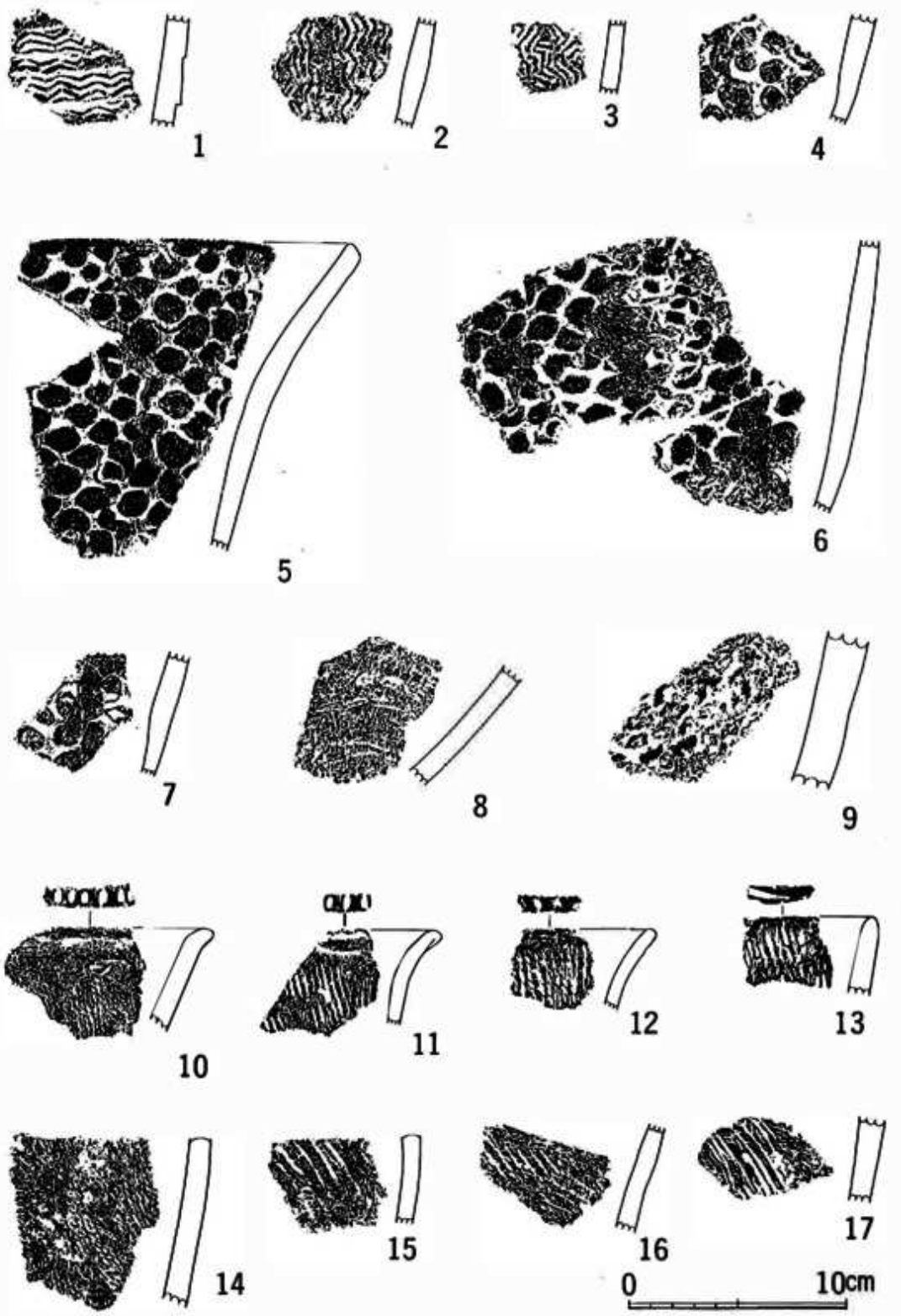


図―13　岳南地域の縄文早期前半の様相変遷図

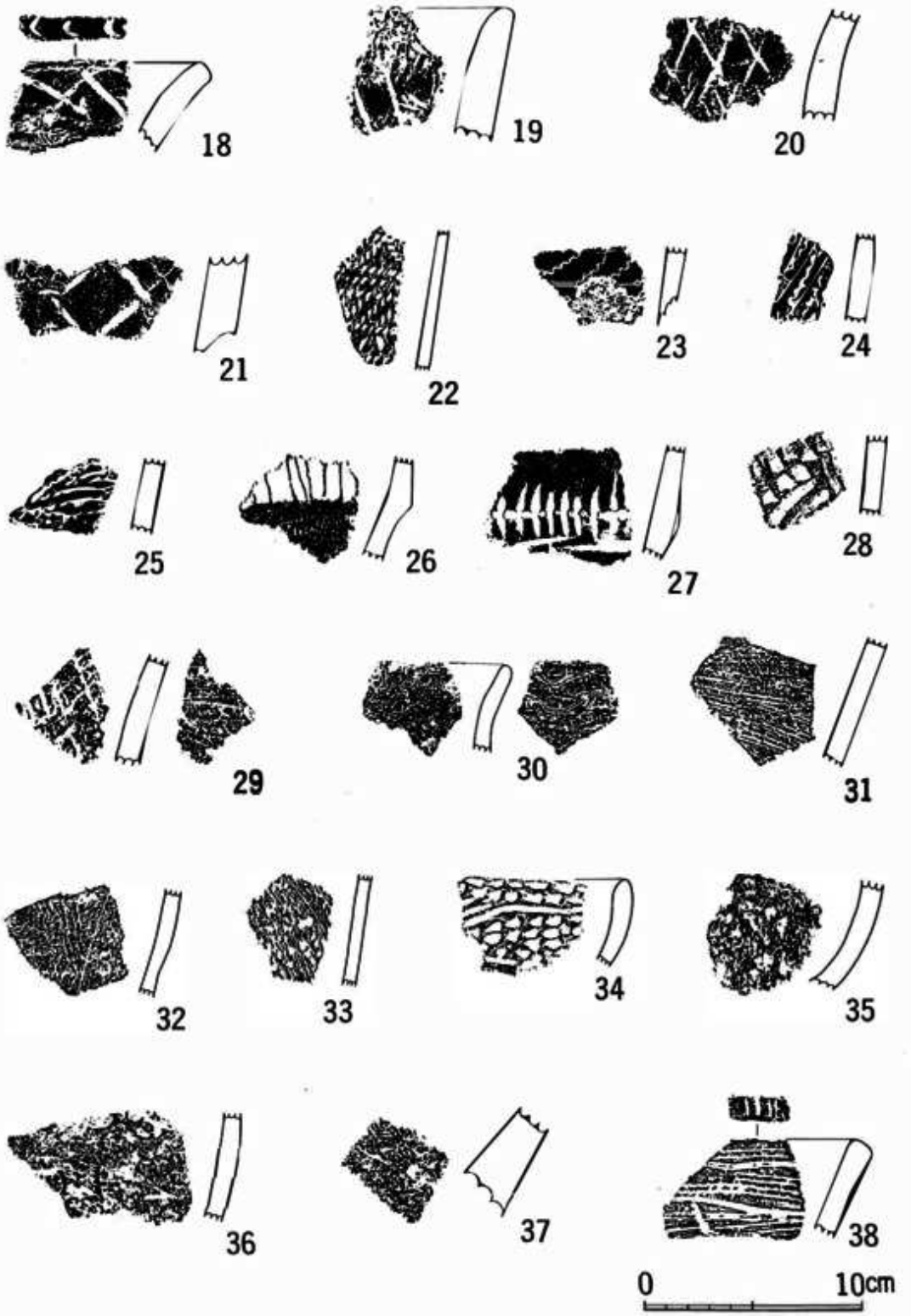
資料　富士宮の縄文時代早期主要遺跡について（沼久保坂上遺跡より転載）



月の輪上遺跡・箕輪Ｂ遺跡・丸ヶ谷戸遺跡表面採集遺物

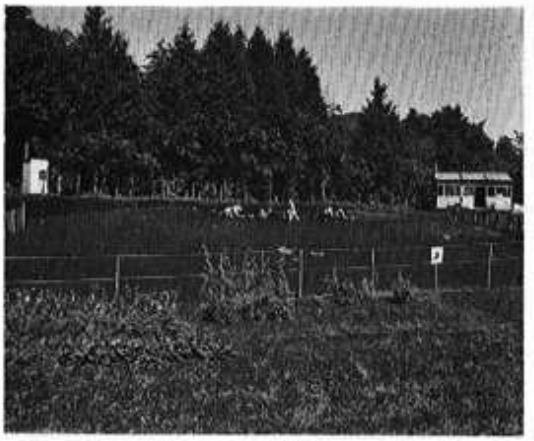


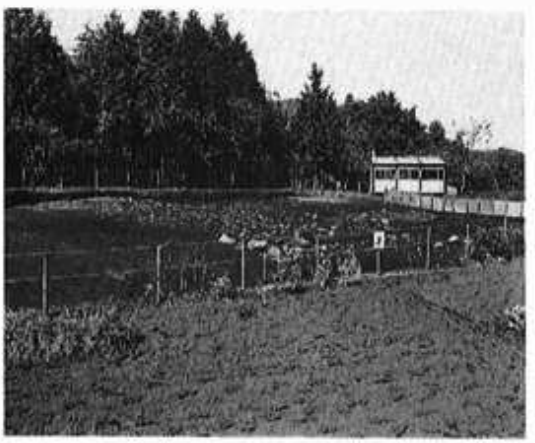
奥山地遺跡表面採集遺物①



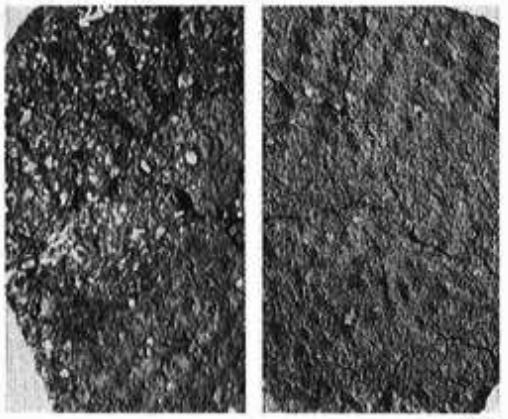
奥山地遺跡表面採集遺物②

図版－1　調査概要

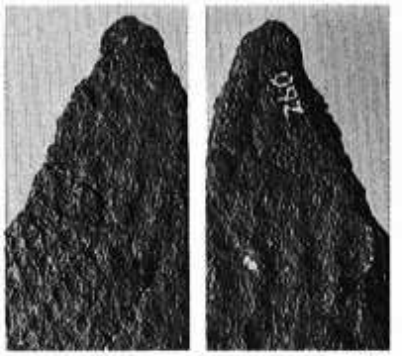




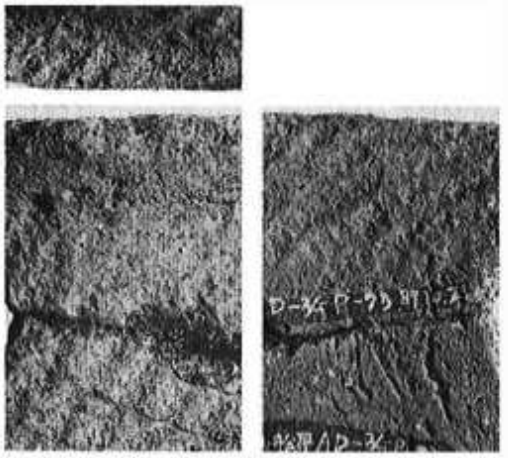
図版－2　出土土器（1）



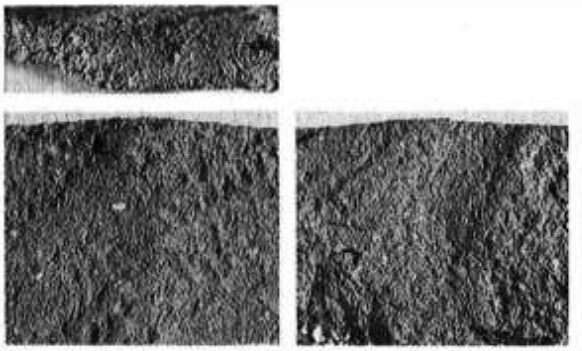
217



260

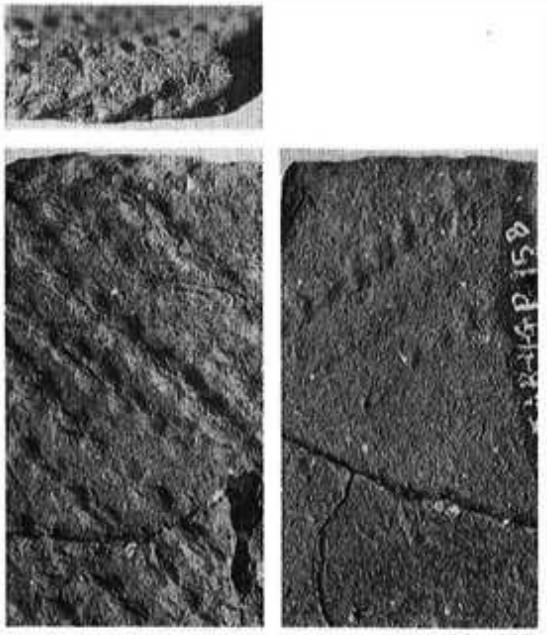


73



76

16



91、158

128

図版－3　出土土器（2）

20

3

89、148

145

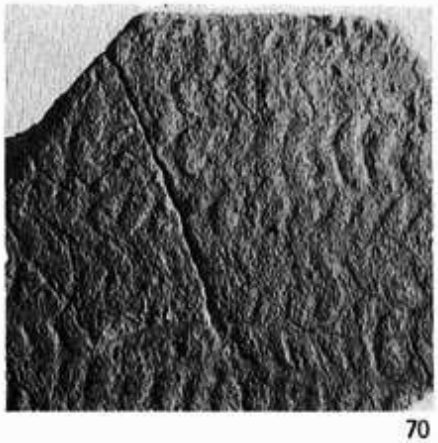
71

2

300

84

89、148

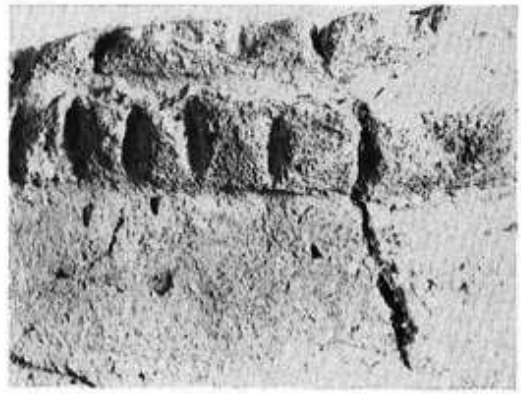


70

96

図版—4　出土土器 (3)

表 5



50

190、234、表 6

232

27

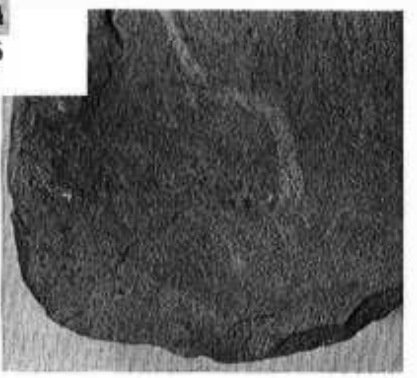
表 7、34

44、129

図版－5　出土石器 (4)

1～5

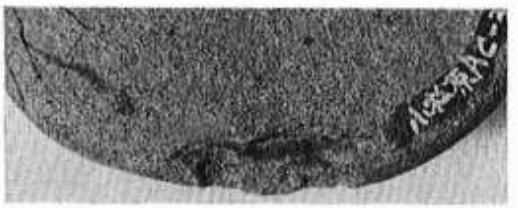
6



7

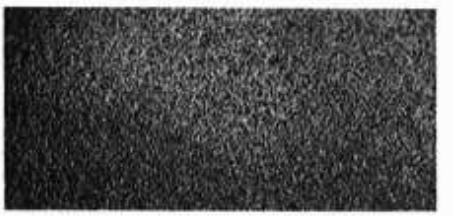
10

16



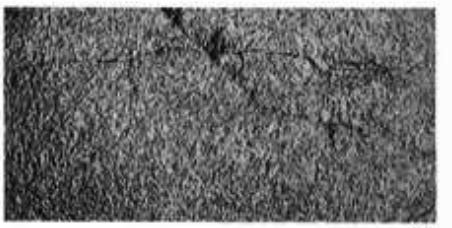
22

23



24

21



15

21

富士宮市文化財調査報告書第12集

小松原A遺跡

平成元年3月15日

編集　富士宮市教育委員会
発行　富士宮市教育委員会
〒418 静岡県富士宮市元城町1－1
TEL (0544)27－3111㈹
印刷　静岡県静岡市登呂6丁目7－5
株式会社　篠原印刷所